光

第十六號

大正十一年十月

◇天華香洞録抄……西田天香

◇エックハルトの神秘説と一燈園生活……西田幾太郎

◇文化生活と懺悔道……谷口雅春

同人懺悔報恩の奉仕者
祈願不二の光明によれる生活
費用供養されたる淨財

◇幼きものへの供物……松下吉衛

◇惡魔の群……吉田暎二

◇返照録……遠近兄姉

一燈園・宣光社

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

光明祈願（暫定）

不二の光明は宇宙に遍滿する陽光の如し。物あり、之に觸れて色々の光を發す。光明祈願は卽ち起稿者識界の現象に過ぎず。添すべく、削すべく、正さゞる可らず、改作また不可なし。暫定と名づくる所以なり。

不二の光明によりて新生し、許されて生きむ。

我等は先づ不二の光明によりて復活新生し、神に委れ佛に養はれ他に障りなき生涯を送らざる可からず。

諸宗の眞髓を禮拜し、歸一の大願に參ぜん。

内外古今諸宗の眞髓を禮拜すれば、歸一の大願は正に左の如くなる可し。

通願　皆俱成二就大圓覺一

別願　將二來世界眞平和一

別に一宗を立てず、單に一宗に偏らず、古今聖者の光を仰ぎ德を頌し、その遺されたる事業を成就せんことを期す。

懺悔の爲に奉仕し、報恩の爲に行乞せん。

世間一切の罪惡苦患、何人かその責を脱るゝことを得べき。願くば常に懺悔の心を持して十字街頭に奉仕し、菩提心によりて行乞し、以て法界成就の本願に副はんことを。

法爾の淸規に隨ひ、世諦を成ぜん。

天眞法爾の戒相に則り、六度の行願に隨ひ、治生産業に卽して眞道を行じ、永久眞平和を將來すべき生活法を實證し、以て在家俗諦を成就せんことを期す。

卽ち天華香洞に歸り無相の樂園に逍遙せん。

達觀すれば實にも此世は寂光の淨土、妙樂の天國、文明の隆興も進化の事象も乃至淸規戒行も、此の見地よりすれば則ち一の遊戲三昧に過ぎず。憐むらくは箇中の消息、もとよく言辭の髣髴し得る限りにあらざるを。暫らく此の實相に名けて天華香洞といふ。

天華香洞の門、假りに名けて一燈園となす。道に志して尙自ら立つ能はざるもの、乃至老、病、幼者等の爲めに設けられたる一の化城とも見る可し。その存立は喜捨の淨財に成り、在園はその淸規によりて許さる。

天華香洞に立ち、信託を受けたる財物事業の整理經營等に從ふた假りに名けて宣光社といふ。宣光社の目的は世間の執迷紛爭葛藤を根絕し、以て齊家、治國、平天下を期するにあり。

天華香洞と一燈園と宣光社と、三位にして一體、通じては卽ち無相不二。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

天華香洞録

——大正四年中のものより——

西田天香

○この心身が曾て何等かの所に於て誓ひつゝありし事を解け。而して其の義務に對しては、心身を盡くして贖罪すべし。そのあとの赤裸々の身を以て一切の前に奉公せよ。かくて心身は自由なり。執ある故に縛生ず。縛生ずる故に苦あり。苦を重ね縛を濃厚にして以て夢の如き功果を爭ふ。あさまし。

○眞の文明は無縛無執裡に產る。

受。布施（行乞托鉢）

貧者弱者及有道の事に與へ、又供養し奉公する心を起さしめ、徹しては無執となる。

儉。持戒（溫情愛語）

侵略的氣分、陰險術數、放逸無慚、あらゆる破戒の態度をなからしむる爲。

下。忍辱（下座清潔）

他の惡に對し輕々しく惡を以て酬いず、誠の上にも誠を致し德と愛とを以て悅服せしむ。

上。禪定（打座禮拜）

心身をとゝのひ神と合一し佛に徹し脫落すること及び報恩の至誠を盡す事。

勤。與。精進（研究奉仕）

科學をはげみ生產につとめ、能く儉に能く勤め能率增進。

捧。智惠（見學示談）

一切を成就する般若の智惠をみがく。一切の無明に對する濟度の方便智をみがく。

右は人類が地上にあつて自他適悅して生存するに最必要なることとなり。然るに方今世界は不幸にして多く缺くる所あり。恨事不過之。而して結果として世界的大破壞を來さんとす。人類の完成（解脫）世界的平和の爲め愁むべし。此罪は無明なり。而して我は最罪を感ず。願くば余をして贖罪の途に立たしめよ。されども我力は弱し。願くば他の同情をたまへ。

光明（眞實の）にてらされて

1 己の心身を正しく整ひ
2 己の家庭を正しく整ひ
3 己の生活を正しく整ひ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

4 己の町村生産團體を正しく整ひ
5 政治的道心を正しく整ひ
6 國家を正しく整ひ

一致團結、有道、惠愛、正義の國たらしめ、內外の無明、惡、迫害に對する無私の權威をみがき、以て世界眞平和の祈禱となすべし。

一如何にすれば無上無漏の樂を享くるを得るか
一如何にすれば世界的平和を將來し得るか
一如何にすれば貧富問題、勞働者資本主の問題を解決し得るか
一如何にすれば國家は適悅至樂及び無難なるべきか
一如何にすれば世の惡を整理し得べきか
一如何にすれば互に過去の確執を去り得べきか
一如何にすれば人々互に爭はざるを得べきか
一如何にすれば文明をきよめ得べきか

右の秘鍵、天華香洞にあり。
之を明かにせん爲めこゝに法財あれば用ゐて以て成るべく深く細かに互に研究闡明したし。

○我一人修、同志與共修、同情者の部分的共修を勸進す。更に一切有緣の人に契緣す。
○安心之場所者無相空寂舍也
○於安心之場所攝受一切衆
○無相宴座之場所者不執上下不執都鄙不執貴賤不執美醜雖然常被呼于人天在隨處若不呼時者歸本所本所者爲迷者何時在于下位下位者即紫雲靉處也
○此處に歸つて見ねば其風光はとても分らぬ、此紫雲につゝまれて一切界を見よ。
○己の人格以上の人を造る事能はず。若し、以上の人、生れなばそは他の感化によりしなり。
○己以上の事を他に求むる資格なし。もし求めて諾はるれば、そは己の德にあらず其人の德なり。
○故に己を責めて他を責むべからず。
○他の思ふやうにあらぬときは必らず己の罪としれ。
○他の罪を見しときは己の罪を見せてもらひたるなり。喜ぶべし〳〵。
○いつのまにやら他の罪を數ふる人となる。愼む可し。
○斷じて審かず、誓はず、又辯解せず。
○考へ出すは己の務を忘れし時より始まる。
○己の務をなすときは考へねばならぬ問題が自然のことわりにて消滅する。
○間違つた事をやめて戒體に任ずれば迷なし。迷なければ悟る必要なし。
○一度悟つて方便慧をしらべ、清規を作りてそれに從はしむ。從へば迷消ゆ。
○行へばよい事を、考へさせて行はさぬは最も巧妙なる魔の術なり。
○考へに耽りたいは迷者の性なれ共、それを破るは先達の力なり。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

エックハルトの神秘說と一燈園生活

西田幾多郎

一燈園のお方に知り合ひのある關係上、いろ〳〵一燈園の主意なりお考は、幾分か解つて居るかと思つて居るけれども細い所まで承知してるわけではないので、今夜、どう云ふお話をすれば、皆さんに適當であらうか、判斷に苦んだのであるが、學校の講義のやうなものを話さうと思ふ。それが皆さんの御要求であるか如何かも心もとないのである。一燈園——私の知つてゐるだけの——から見て、西洋哲學上、相類してゐる所があり、或はそれが一燈園の主義に、哲學上思想上の基となりはしまいかと、思ふことを話してみようと思ふ。

西洋の文化は、一體に、外面に發達して、色々な事物の權威を、外界の上に發動する傾向がある。然し、それに反して西洋の哲學宗敎の根本基調をなして流れてゐる一つの流がある。一言にして云へば神祕主義 Mysticism である。東洋の佛敎に類似し、特に禪宗に似てゐる所のものである。一燈園では未だ敎理が立つてゐる理ではないが、結果に於て、さう云ふこころへ結びついて來はしないかと云ふ考を私は持つて居る。

神秘主義は西洋では餘程古くから起つて、ギリシャの終り頃にその萠芽が見られるのである。紀元三世紀の頃既にプロチン Plotin が出て居る。プロチンに從へば、世界は一つのものから出來てゐる實在であつて、心でもなければ物でもない。凡てがそこから出て又凡てがそこに歸する、即ち凡ては一に歸すると云ふ考を持つて居た。このプロチンの思想は、哲學上に一つの流れの源をなして、中世の終りから近世の始め十二三世紀の頃西洋哲學の上に神秘主義の花が盛大に咲き誇り、遂に宗敎に結びつき、かう云ふ敎理を持つた宗敎團體なども出來たのである。

マイステル・エックハルト Meister Eckhart が、その代表的な哲學者である。中世の終りから近世へかけて神秘主義哲學が盛大になつたのは、此人の思想を中心として發展したのである。今茲ではエックハルトを主として論じ、一燈園との類似點を見て行き度いと思ふ。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

彼の哲學から、基督敎と離れて精神上の修業をした宗敎團體が生れた。凡てを棄てゝ貧困と云ふことを修業しようとする團體が生れた。エックハルト自身は、學問的に彼の思想を說いたのであるが、弟子のうちには、純粹な學問上の立場に立つて、思想を傳へて行つたものと、實行方面に向つたものとがあつた。後者は絕對に何ものをも所有せず、貧困と謙遜とをその思想の結果として修業し、身も心も貧困となつた處に、神との一致を得ようとしたもので、和蘭のルイスブロック Ruysbroeck はそれを嚴密にやつた一人である。ルイスブロックに關しては、マーテルリンクの著があり、日本でもよく知られてゐる。トーマス・ア・ケムピスの著書とされて居る『基督の模倣』Imitation of Christ なども やはり此思想と連絡があるものであると思ふ。實行方面に向つたものゝ實行が、如何云ふ方面に表はれたかと云へば、要するにこの『基督の模倣』と云ふことであつたやうに思はれる。

エックハルト（1260—1327）は十三世紀から十四世紀にかけての人で、宗敎家と云ふよりも學者風な所のあつた人である。彼の說敎は多く殘されてゐるが、その說敎のなかには、哲學上の解說が含まれて居る。それを見ても如何に學者風な宗敎家であつたかが知れる。その弟子達には、學者として立つたものと、ルイスブロックの如く實行方面に向つたものがあつたことは、前述の如くであるが、この思想に似て居るものにアッシジのフランシスの方がやゝ時代が古いのであるが、何か兩者の間に關係があるやうに思はれるが、未だ研究してゐないので詳かにせぬ。日本で云へば禪宗のやうなもので、一種の修道院的なものであつた。

キリスト敎は、外面的な仕事に重きを置く風がある。無論キリスト自身は、ユダヤの形式に反して、自分の精神を淨めるのが、主であつたと思はれるが、一般のキリスト敎は、外面的に傾いて仕事を主として居るので、今日の基督敎には、かう云ふ思想は、正當なものとしては見られないが、哲學上にはぽつ〳〵現れて居るのである。然し其時代の如くでないことは云ふまでもない。

エックハルトは心の働きを三つに分けて居る。一は五官の働き即ち感官と、今一つは考へる力即ち理性である。以上は普通に誰でも知つて居る所のもので、一は見たり聞いたりする感覺と、一は考へる力、理性とであるが、彼は其上に超理性的な能力 Super rational faculty があるとした。それは心が一つになつた狀態であつて、前述の感官の働きと理性の働き以

外に、今一つの別な働きがあるのでなくて、それらが一つになつたとき、純一になつたとき、私のないとき、言葉を換へて云へば我のないとき、我を忘れたとき、火花のやうに現はれる Funke (火花) である。この力によつて、自分と人との區別がなくなり、自他一體、神と我と一致する働きがあるのである。それは感官或は理性で考へて云へるのでなくて、それらを棄てたとき現れる光である。光と云ふ言葉は、プロチンの時代からあつて、ラチン語ではスチンテリア Scintilla 獨逸語でフンケ Funke である。エックハルトはフンケと云ふ言葉で現して居る。

その光のうちにあつて、我と物と人と、凡てが一つになり、神と人とが一つになると考へたのである。エックハルトは無論基督教徒であつたが、彼の神に對する考は、基督教徒と餘程違つてゐたので、正教徒から異端視され、ローマ法皇は彼の書を燒いたと云はれて居る。

エックハルトの神とは何麼ものかと云ふに、先づプロチンに溯つて説かねばならぬ。

プロチンは、ギリシヤの終り紀元三世紀頃の人で深い思索家であつて、ショウペンハウエルの所謂『神の如きプラトー』よりも、純粹哲學としてはプラトー以上だとする人もある位である。人としても其れ以上であつたであらうと思はれるが傳記が詳かでない。然し、當時の人達から非常に尊敬されて居たことは事實であらう。日本の禪僧のやうな逸話が澤山にある。弟子がよく『あなたは何處で生れたか、年は幾つだ』と問ふたが、『何處で生れたとて、どうでもよいではないか、其麼ことは外面的なことだ』と云つて答へなかつた。又或時プロチンの肖像を寫生したいと申出でた畫家があつたが、『體は心の影だ、影を描いて何になる』と云つてその申出を斥けたと云ふことである。

プロチンが神の思想を取り入れたのは、ディオニシュース Dionysiacs の書いたと云はれて居る著書に依つてゞある。此著書に據ると、神の考は基督教で云ふ神と違つて居る。基督教では、神は全知全能であると云ふが、彼に從へば、神と云ふのは何んとも云ふことが出來ぬものである。何んとか云へばもはや神を限るのである。完全無缺、全知全能、かう云へば既に何んとか云つて居るのである。何んとも云ふことが出來ぬものであつて、然も凡ての基となつて居るもの、それが神である。其處では凡てのものが一つである。其處に於て我と神とが一つになれる。ちよつと聞けば無差別と聞えもしようし、無差別な暗い穴のやうな神だとも考へられるかも知れないが、無差別と云へば既に差別に對立して居るから神では

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

ない。それを超えた所に神があるのである。其處から凡てのものが働いて出るのである。我々のうちには色々な差別がある。その差別は、差別を絶した絶對無差別——かう云ふことが既に當を得て居ないが——一に歸した處から出て來た差別の種々相である。我々の働きは一度はそこへ歸して、そこから更に働き出て來る差別の働きでなければならぬ。

この神の思想が實行方面に向へば如何なるかと云へば、今云つたやうに本に歸ること即ち一に歸することが、人生の凡ての目的である。天地未分の前の狀態に歸ることが目的であると考へて居る。人が爭つたり、苦惱したりするのは、此本から離れる故であつて、再び本に歸すと云ふのが人生終始の修業である。それには凡てのものを捨てなければならぬ。財產と云ふがやうな物を捨てるばかりではなく、心の持物智識をも棄てゝ、全くの無一物となつて、本に歸らなければならぬとした。これがプロチンからエックハルト迄續いた神の觀念である。

道德の方面に於ても、普通の道德と違つて居て、行爲の結果を考へないで、心持其ものゝうちに凡てを認めようとするのである。「基督の模倣」と云ひ、獨逸神學の感化を受けたと云はれて居る、マルチン・ルーテルを通じて現はれた宗敎改革と云ひ、此思想の流れに沿うて居るのである。此思想の流れは西洋と東洋とで、種々な點に異つた所はあるが、印度のやうに遠い處にあつても、佛敎の如き同時に相類するところがある。

以上說いたゞけでは、或は難解であり、プロチンやエックハルトの所說は、我々の日常の考と非常に矛盾するやうに思はれるかも知れぬが、少し考へて見ると、我々が手短かに云つて居るところと、違ひないと思はれるのである。又單に哲學的な、論理的な、抽象的な考のやうに思はれるが、然し人間の心を考へて見れば、エックハルトの云ふが如きものであらうと思はれる。心が純眞で純一である狀態即ち我と物とが一に歸したところまで行けば、物そのもの、人そのものになると云ふ感じは、絕えず我々の心に働いて居る。神そのものになると云ふ感じが我々を支配する場合があるのである。人類の愛と云ふが如きは、神に於て一つになると云ふところから働き出て來る愛を指すのである。

心と云ふものは妙なもので、種々に變つて行くが、その變るうちに、矢張り變らないものがある。例へば赤いものを見次ぎに青いものを見る。赤いものを見た場合は赤に、青いものを見た場合は青に變つて行くが、變ると同時に、赤そのもの青そのものにならずに、赤と青とは違ふことを區別して變ることのないものがある。然らば違ふと云ふことを區別する

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

のは、何に依つてするのであるかと云へば、やはり、變ると同時に、そのものにならずに、變ることのない、一つのものがあるからで、全くその底に共通でしかも不變な、一つの流れがなければ區別は出來ないのである。

人と人との關係に於ても、人と我との差別を持ち、人と我との判然として判斷をつけて居るのも、人と我とは違ふと、もに、變りのない同じ一つの流れに沿うて居るからである。同情や憎みが起るのも、その流れの中に於てであつて、心と心の結びつきが愛となり、心と心の衝突が憎ともなるのである。

火花と云ひ光と云ひ、我々が神ともなして居るところに到達するのが人生の目的である。エツクハルトの考は悪く行けば、無差別に墜ちて消極的になるおそれがある。人の心と我の心は常に離れて働き、離れて各自思ひ思ひの方向に活動を續けて居るが、一度はその源へ歸つて一つに結ぼれて居る處へ立ち歸つて、そこから自由に働き出して行くのでなければならぬ。源に歸つたのみで自由に働き出して來ないでは、一方に偏することになると思ふ。哲學でも宗教でも一度は其處を通らなければならない。源へ歸つて更に流れ出して來るのでなければならない。其處が哲學の基である。プロチンやエツクハルトが哲學の基をなして居ると云はれるのも此點に根差して居るのであると思ふ。獨や、後れて出たヤコブ・ベーメも同じ考へを持つて居り、獨逸哲學の頂點とも云ふべきシエルリングやヘーゲルもこの思想の流を受けて居る。近代の哲學は發達を異にして居るが、源泉をたづぬればそこに歸着するのである。

實際問題もそこが根本であつて、一に歸された心から更にまた働き出て來なければ何麼働きもなくなる。唯心が一に歸したと云ふだけで、赤でもなし青でもなしと云ふだけでは無差別に終つて居るに過ぎない。又情の方面でも、可愛とか憎むとか云ふ働きがなく、可愛くもなければ憎くもないと云ふので、そこに何麼情の動きをも無くして了ふと云ふのであれば、虚無に墜つて了ふと云ふ弊害があるのである。さう云ふことのない、一に歸された絶對の自由から哲學も生れ道德も生れるのである。

普通に我々が道德に支配されて居るのは、眞實な自分でないと思ふ。外部から與へられた形式に依つて、その形式に自己を當て篏めて行つて居るに過ぎないやうに思はれる。然し眞實の道德は、凡てのものを忘れて一度この一に歸されたなかに這入つて、其處から出て來るものでなければならぬ。形式其他あらゆるものが、生きて働いて來ることでなければな

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

らぬ。其處に哲學と道德が同じレヴェルに立ち、純粹な情の働きと心が一致するのである。

さう云ふ眞實在のうちに這入つて始めて藝術や、宗敎や、哲學が生れるのである、單に無に歸して了ふと云ふのであれば、何の働きもないものになつて了ふのである。智識は智識として働き、人情は人情として働くには、一度はそこを通して、眞實に生きて働いて出るのでなければならぬ。かうして働き出てこそ、その眞實在が凡ての基をなして居ると云はれるのである。このエックハルトの考は多少靜寂の一方に偏して居ると思ふが、一燈園のお考に通じて居るのでないかと思ふ。

斯う云ふ立場に立つて働く人も、働くと云ふことゝ思想が結びつかなければならないと思ふ。只働くと云ふだけでは無意味になりはしないかと思ふ。それかと云つて只思想だけでは、精神上のことばかりになつて、學問と變りがないものになつて了ふ。超理性的な智識は、たゞ考へて出るのではなくて、實行のうちに、働いて居る間におのづから出るものである。唯働くといふだけでは、肉體的な勞働と變りがないものになつて了ふが、茲で云ふ働きと云ふのは働きのうちに智識を含んで居なくてはならぬ。

藝術家の技能も廣い意味で一つの智識である。學問的な智識でないが、働くことに依つて得られる智識である。オランダの畫家レンブラントが弟子から『何麼繪を描いたらいゝだらう』と聞かれたとき『考へて居ては駄目だ。まあ描いて見よ』と云つたと云ふ話があるが、今云つた智識のあることを云つたものである。描いてゐる間におのづから何麼繪を描けばいゝか、どう云ふ筆觸をすればいゝかと云ふ智識が得られるのである。その働きにはちやんと眼がついて居るのである畫家の筆端や彫刻家の鑿の先には、この眼がついて居て決して盲目ではない。我々の頭の中のやうに銳敏である。然らば其眼は何んであらうか、超理性的なものから得られる眼である、我々の日常の行爲の上にもこの眼がついて居なければならぬ。其眼なくして働くことは、たゞ肉體の運動に墜ちて了ふ。それかと云つて眼だけで即ち智識だけでは駄目である。レンブラントの云つたやうに、描いて見なければ解らないのである。働いて見なければ解らないのである。これが凡ての基であり眞實なものであると思ふ。（未完）

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

文化生活と憐愍道

――この一篇を敬愛する倉田百三氏に呈する――

谷口雅春

一、生存競爭なき世界を求めて

西田天香氏の『他を凌いでならば生きまい、許されてならば生きよう。』と云ふ態度はこの世で最も慈悲深き人が採らうとした所の最も好ましき態度であるのは云ふまでもない。けれどもこれが果して精密に言葉通りに實行し得ることだと云ふことを斷言するには今しばらく考察の餘地があらうかと思はれる。

過日謙道會の主催で綾部の公開堂で天香氏の講演があつた時、自分も參聽する光榮を得たのであるが、その時氏は氏が今の生活に志される『轉機』の御話をされたが、その中にかう云ふ話がある。氏が他を凌いでならば活きまい、食べて減るやうなものは食べまいと思つて故郷の産土神社の境内の小亭「愛染堂」で三日間食を斷つて座つてゐると赤兒の泣き聲が聞えた。赤兒が食慾を訴へるのは自然である、訴へずに、泣かずにその儘死んでくれたら却つて親の嘆きとならう。嬰兒は泣くことによつて母より乳を施され、母は乳を施すことによつて、乳の張り切る苦しさからのがれるのである。そこには生存競爭はない、施す者と施されるものと兩方得する生活である。嬰兒が空腹を訴へるのは自然である。植物を見るとその惠みを受けようと思つて葉を一枚一枚太陽の方へ向けてゐる。太陽と木の葉の間に生存競爭はない。これは自然である。嬰兒が乳を求めるやうに、植物の葉が太陽の方向に向くやうに天香氏も求めて歩いて見ようと考へたと云はれたのである。

果して其處に生存競爭がなかつたかと云ふことは自分にはハッキリと受取ることが出來ないのである。木の葉が太陽の方向に振り向く時、木の葉と太陽、即ち受けるものと與へる者と、この間には生存競爭はない。しかし受ける者同士の間にはやはり生存競爭がある。先づ太陽の光線を受けるために葉面を太陽に向けた樹木が稍々大いなる樹木であると想像せ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

よ。その樹木の下には太陽の光線を受けることをのぞんでゐる無數の小植物があるけれども、大樹に遮られて日光を充分受けることが出來ず或は枯死し或は痩せてゐるのである。樹木が太陽に葉面を向けるのは自然であるが、その自然のうちにはかくの如き爭鬪が潜んでゐるのである。自分はこの事實を無視することが出來ないことを悲しく思ふ。

嬰兒は泣くであらう。母親は哺乳しやるであらう。この時與へる者も與へらるゝ者も幸福であらう。しかし母親が與へる者であるためには、兎も角も必要なる營養の補給をうけねばならない、しかして（將來はいざ知らず）現在に於ては生存競爭による強者生存の一形式を通過してのみ、母は哺乳に必要なる營養の補給を受くることが出來るのである。太陽と植物との場合では受くる者の間に爭鬪があり、嬰兒と母親との間には與ふる者の間に爭鬪がある。かくの如く無邪氣なる嬰兒の生活すら爭鬪による強者の生存によつて支へられてゐるといふことは吾々人間の世界にとつて何といふいたましいことであらう。

爭鬪のない世界はないか、犧牲者の傷ましい叫び聲のない世界はないか。犧牲者が背後に叫んでゐながら偶々強者であつたといふ理由で、母親と嬰兒が爭鬪なく與へ與へられるといふことだけに吾々はその平和を祝福しても好いだらうか。吾々が理想として望ましい世界はかやうな背後の犧牲者すらない、エデンの樂園にゐる母親と嬰兒との生活の如きでなければならない。しかし悲しい哉、自分には如何なる尊き生活すら背後にかくれたる犧牲者のいたましい叫び聲なくして成立たないといふことを否定する譯には行かない悲しさを吾々はどうしようぞ。

二、優强者のみの勝利する世界

天香氏の解說する所によれば、執心を解脫し去ればこの世この儘で無爭鬪の光明世界が來るといふのである。執心を解脫し去るのは如何なる程度に於てゞあらうか。自分にとつて植物の葉が太陽に向ふのすら一つの執着と觀ぜられる。それを執着と見ないで「自然」であり、「惟神」であると見る人もあるであらうが、たとひ如何に觀方を換へようとも、名稱を換へようとも、その「自然」なり「惟神」なりは背後に犧牲を出すところの「自然」であり「惟神」であつて、それも見ようによつては日光を欲して執着する一種の慾望であるが故に自分がそれを執心と名付けることは敢て不妥當ではないで

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

あらう。

されば、この世界から悲慘なる犧牲を全然なくするためには、かゝる執心をすら、斷絶する必要があるであらう。しかしかゝる執心をすら斷ずる處に生物は果して生存することが出來るであらうか。樹木がその葉を太陽の方向に轉じようとする執心を斷ずる時になほその樹木が生きることが可能であらうか。これは重大なる問題である。

倉田百三氏は戲曲『父の心配』に於て、その主人公なる父牧師順作並びにその副主人公なる成吉をして云はしめてゐる――同情のために眞理を曲げてはならない、幸福な運命を享けるに割宛てられたものは勇敢にその幸福を享受しなければならぬし、苦しい運命を擔ふやうに割宛てられたものは勇敢にそれを背負はなければならない――といふ意味のことを云はせてゐる。こゝには不幸が斷絶せられてゐない、不幸を智的な諦めによつて一層高き別なる價値あるものにしようとの努力はある。しかし戀を奪はれた道子はその不幸をあきらめることによつて、生活に別なる價値を拓かうとしてその曙光を見てゐるだけで、失戀といふ不幸そのものが斷絶せられたのではない。一人の成吉に二人の女性が戀すると云ふことは本當に調和されたコスモスに於てはあつてはならないことだと自分には考へられる。渾然と調和された世界に於ては一人は互ひに一人とのみ戀するやうに創造られてあるべきである。そこには失戀といふことがあつてはならない。失戀はそれ自身に於て不幸であり不調和であるからである。失戀がある人に於てはより高き心境を導き出すための道程である場合もあるが、失戀がある人に於てはその人を一層惡しき狀態に、再び起き上る事の出來ない深い悲しみの狀態につき落すといふことも亦あり得べきことである。失戀に堪へ得た勇者のみが、不幸に堪へ得た勇者のみが、この世に存へることが出來不幸に堪へ得ない者は亡ぶるの他はないであらう。それは優强者のみの勝利する世界である。『父の心配』に現はされたやうな世相は常にこの世にはあり勝なものである。『同情のために眞理をまげてはならない』そして眞理とはある者は幸福に、ある者は不幸であるといふ運命を云ふのではあるまいか。

三、人間中心の愛と我利主義の延長

西田天香氏の「他を凌いでは生きまい」と云ふ態度が、まだ人間中心主義である間は人は生活し得るであらう。しかし

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

「他」を押しひろめて蟲類から微生物の世界まで包括せしむる時には、人はもう生活する餘地がなくなるのである。空氣中に飛散する多くの微生物に對する愛が深まれば、呼吸をすることのために死ぬかも知れぬところの多くの微生物のために呼吸をすることを差控へなくてはならなくなるだらう。水も又同じ理由で飲めなくなるだらう。作物を害する害蟲を殺すことも出來なくなるので、作物は多く枯死して人類同胞の食餌とするに足りなくなるだらう。一人の人間が生活するためにはかくの如き多くの生物を殺すことによつてのみ可能なのであつて、母親對嬰兒の哺乳關係だけを見て、かゝる場合は毫も他を凌いではゐないと考へることを不妥當だと認めると前述した理由は茲にあるのである。

何故、人類は多く人間中心にならずにゐられないだらうか。その理由の第一は種族に對する愛がはたらくからであらう。人間は人類仲間全般が幸福になるやうに、害蟲は害蟲仲間が幸福になるやうに、蟻は蟻の同胞が幸福であるやうに同種族に對する愛が働いてゐるやうに見える。人間の仲間でもさうではあるが同種族に對する愛が失はれて、全く自己一個の幸福のためのみに行動してゐるやうに見える動物や蟲族もある。しかし個人主義に現れてゐる自己愛と同種類全般に對する愛とは自分には五十步百步の我利主義の發現に見えるのである。この場合自己の屬する種族を、自己に屬せざる種族より愛すると云ふことは、その盛衰が自己の福祉の增減に最も影響深きものを最も愛することであり、自己に最も近親なるものを最も愛することであり、自己の福祉に關係すくなき者をより少く愛することであり、親近ならざる者をより少く愛する事である。それは實に自己中心より發現した愛であつて、個人主義又は利己主義の延長と見らるべきものなのである。斯樣な意味のみに於ては、蟻が人間の生活に侵入し來つてもその同族の幸福をはからうとする努力と、人間が蟻の生活に侵入し來つてもその同族の幸福をはからうとする努力とは、どちらがより尊いといふことは出來ないのである。何故ならそれはどちらも、自己の屬する種族のみの幸福を中心とする我利主義の延長に過ぎないからである。

四、人間の同族愛の別の根據

しかし人間の同族愛には又別に根據があるやうに見える。即ちこの世界を宇宙意志によつて目企されたる進化の徑路にあるものと見、最も進化したる生物を人類なりと見、より少く進化せるものはより多く進化する爲の一狀態に過ぎないと

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

見る一考察である。この見地よりすれば、より少く進化せるものが、より多く進化せる生命に食はれ包攝されて、より大いなる生命に進化することは望ましきことであるといふのである。小さき魚鳥の生命は、人間に食はるゝことによつて、より大いなるそしてより高き生命なる人間の生命に包攝されて、はじめて大いなるより高き進化を遂げ得ることを喜ばねばならぬと云ふ觀方である。これを手短かにハツキリと言ひ現はせば劣弱者は優强者の犧牲になるべく宇宙意志によつて定められてゐるといふのである。

この觀方は慥かに事實の上に根據をもつ。假りに人類の一人が虎列拉病に罹りたりとせよ、黴菌を殺さなければその人は生命を續けることが出來ないであらう。しかしその人の愛は黴菌を殺すことすら可哀想なと思ふのであらう。黴菌の生命と人の生命とは兩立しない、道德はどちらの生命を選ぶべきであらうか、多くの人は人間の生命を選んで生かさうと努めるであらう。そして道德的には何等の苛責を感じないであらう。これは何故であらうか、黴菌よりも人類は高等に進化をとげたるが故ではないだらうか。これは事實の上に根據をもつ。

五、文化主義の極まるところ

優强者――より高く進化をとげたもの、或はより高く創造られたもの――は劣弱者を犧牲にしてもよいと云ふことを一日でも肯定することなしには、すなはち一日でも一疋の黴菌すら殺すことなしには吾人は生きられない、――そこで吾々は人間中心論が神の御旨にかなふものであると考へようとするのである。しかし仔細に觀察するならば、事實(神學上からではない)人間は平等ではないのである。いろ〳〵の天分の相違もあれば、この世界に生きるのに適せぬ人もあれば適する人もあるのである。即ち人間の中にも優强者と劣弱者とがあるのである。優强者の勝利が神の御旨であるといふ世界觀を人間同胞の中に當て篏めるならば、人間の優强者は人間の劣弱者を犧牲にしてもよいといふことになりはしないだらうか。文化に貢献する處多きものは、文化に貢献する處少き者よりも重んじられはしないだらうか、事實又重んじられてをり劣弱者は蹂躪せられてゐるのが現在の世相なのである。文化主義の極まるところ、この劣弱者に對する憐愍感は、進化し行く宇宙の表面相にくらまされて次第に磨滅し行かざるを得ないだらう。宇宙の表面相の進化の裏に、人間に於て本

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

當に尊い者たる憐愍感がうすれて行くならば、その進化を吾等は果して祝福しても好いだらうか。

六、憐愍感を生かさうとする人

こゝに憐愍感を生かして行かうとするならば人は文化に逆向して行くやうな方向をとらねばならないだらう。その人の愛が强ければ强いだけ、弱き者を犧牲にすることを出來るだけ少くして生きようと努力しなければならないだらう。「都踊」はその美しさに於てそれ自身文化的意義をもち、存在してもよい理由を持つことは倉田百三氏の云ふ通りであらう。しかしかゝる文化的意義の上から存在してもよいと思はるゝ「都踊」が存在するために、種々の憐愍の感情を蹂躪る幾多の條件が必要なりとするならば、西田天香氏がかゝる「都踊」の存在を祝福することが出來ないと云はれたのも尤のことだと考へられるのである。

文化の發達が、劣弱者の犧牲を要求する以上、犧牲を喜ばない愛深き聖者は西田氏のそれの如く、文化主義に逆行するが如き態度をとらなくてはならなくなる。文化そのものに反對するものではない、文化が生ずる劣弱者の犧牲を喜び能はざるがゆゑに、かゝる殘忍を存在の條件としての文化には祝福しがたいのである。文化はそれ自身に於ては、粗野なるものに比べてより價値多く、又同胞の喜びとなるであらう。たゞその文化的發展のために弱き者に對する愛が生かされないのは、憐愍感の最も鋭利なる人によつては到底しのび難きことだらう。

西田天香氏が發心の當初「生存競爭に關係あるもの」を食べまいとしられたことには、自分は强烈なる同感に打たれる、しかし尙精緻にこれを顧る時、自己の生存が、「何者か」劣弱なる者（黴菌の如きものをも含む）の犧牲なくしては成立たない事を知る時自分は途方に暮れざるを得ないのである。最も吾等のうちで憐愍の感じに鋭いものは、かくの如き無數の犧牲によつてのみ成立つ文化は勿論生存そのものをも拒否せねばならなくなるだらう。釋迦は實に斯くの如き人であつた釋迦は生死輪廻の根因を絕つことを志された。しかし彼は自分だけが微生物その他に對する憐愍感を强めて自分だけの生活を否定したのではまだ世界に無數の悲慘事が殘つてゐて已む時がないであらうと知つて、犧牲をより少くして憐愍感をより多く生かすことを宣べ傳へるために自然に死の來る時迄生きてゐられたのである。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

七、釋迦の如く生きる人

この世界は憐愍感を極度に生かしては生きられない、それは既に述べた通りである。しかし死んで了つては、(憐愍感を極度に生かし得るやうな極度に慈悲深き人が死んで了つては)憐愍感を愈々益々痲痺させて進み行きつゝあるこの文化主義の人生を益々悲慘な姿に靡爛せしめて又他を顧みる者がなくなるだらう。かくの如く聖とき人の死は、その人の生活を支へてゐたところの若干の犧牲を解除するだらう。その人が水をのまなくなれば水の中に生棲する若干の微生物はその人が生きてゐた時受けたかも知れぬ悲慘からまぬがれることが出來るだらう。その人が空氣を吸はなくなれば空中に棲息する若干の微生物は、その人が生きてゐた時受けたかも知れぬ災禍からまぬかれることが出來るだらう。かくの如くその貴き人の死はこの世界から不幸と災禍とを減少し得るかはりに、多くの人は憐愍の實行の聖き範例を失うて、一層殘酷なる生活に惡化し行くだらう。西田氏の如き憐愍感とそして罪惡感の篤い人が、今自分の指摘したやうな、微生物に對する愛さへもことごとく持つてゐられないとは信ずることは出來ない。氏は自己の生存の與件としてのいたましい多くの微生物の犧牲に夙(はや)くも氣附いてゐられることを信ずる。しかし氏は全く犧牲なき生活に――それは生存ではなくして自己の死滅より他はないが――入るよりも先に、自己の生存において少しの犧牲の出づるのを忍びつゝも、生命全體の上から觀て、宇宙全體の上から觀て犧牲の總量の次第に少なくならしめんがために、あり得る犧牲の極少なる生活の範例を示すために生存(いきなが)へてゐると云ふ方法を選ばれてゐる一人であるやうに自分には受取れるのである。かゝる一人の聖とき人のこの世に生きてあることは文化至上主義のためにやゝもすれば近頃次第に失はれんとしつゝある人間の憐愍感を復活するための大いなる力として慶びたいと思ふのである。

諒道會に招かれて講演に綾部に來られた時の天香氏は、木綿の筒袖に破れかけた細い茶色の兵子帶をしめた無雜作な姿をして、殆んど剃髮に近いやうな丸刈の頭には、この暑いのに麥稈帽一つ冠つてゐられなかつた。足には素足に禿(ち)びくりの痲裏を突つかけてゐられた。誰しもその人を有名な一燈園の西田氏だとは思ひもそめなかつたであらう。自分が綾部驛にお出迎へして、汽車の中を梅連(うめきた)まで同行した時に氏はその側に座席があいてゐたに拘はらず、まだ稍遠くに腰掛けたが

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

つてゐる人があるのを見てその座席には腰を下ろされなかつたが、京都から綾部までの間に誰も氏を大香氏だとさとるものがなかつたと見えて、氏が梅迫に下車せられる時に謙道會の出迎への人達と自分の他には氏に挨拶する人は一人もなかつた。謙道會の羽二重の紋付羽織袴の出迎への人々にたちまぢつてその素朴な帽子もない丸刈姿で歩かれる西田氏の姿は寧ろ田舍の純朴な百姓だとしか思はれなかつた。

自分は玆で衣服の事に言及ぼして見たいと思ふ。色彩の上から云つても、品質の上から云つても優美で、着心地の好い見る人の目にも美感を與へる文化的服裝は、オスカー・ワイルドの『美的衣裳』を引合ひに出すまでもなく、それ自身に價値があり、この世に存在してもよいと自分には思はれる。それは恰も倉田百三氏が『都踊と云ふものはこの世に存在しても好いと云ふ感じに打たれた』と云はれるのと同じであらう。しかし西田氏は「都踊」なるもの丶存在を可能ならしめるために必要なる不幸なる犧牲者を忘れることが出來なかつた。すなはち西田氏の憐愍感は文化を望む執心よりも一層強かつたためにそんなに犧牲者を出す位ならば「都踊」などはなくてもがなだと思はれたのである。これに反して倉田氏は『犧牲者は憐むべきであるが都踊も存在せしめたい』と云はれたので知れるが如く、氏は憐愍の感じも可成り強いけれども、文化に對する執着も可成り強かつたのである。それで畫家は繪を書くべきであるが施しもすべきである。しかし憐愍の感情のために繪を書くことを止めてはならないといふ風な比喩となつてこの意味が現はされてゐる。『火事をも消しつ丶花をも見たい』と云はれる倉田氏は憐愍感の滿足を得ながらも文化をも樂しみたいと告白せざるを得なかつたのであるそして一般人類の凡その傾向も亦倉田氏と同じく文化を出來るだけ樂しく味はひながらも尙憐愍感の滿足をも味はひたいのだと思はれる。……そして氏に云はせれば、これが所謂人間の定められた運命なのである。

八、文化を求むる心と憐愍を求むる心

文化を飽く迄も樂しみたい心と、憐愍感を極度に生かして行かうと云ふ心とは兩立し得るものではない。『自分より醜き貧しき服裝をしか有たない人は自分のこの美しき着物を見て羨しく感じ、彼がそれを得ることが出來ないことを不幸に感ずるだらう』から憐愍感情の深い人は考へずにはゐられないだらう。そしてその人は出來るだけ何人にも羨まれる原因

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

とならないやうな質素な着物に滿足するだらう。こゝに衣服に關する文化は、全體が羨みのない同じ程度の素朴に逆轉した後事情が許すならば萬人一樣にきはめて少しづつ美しき衣裳に近づき得る他は大なる進歩は急激にはのぞまれないだらう。憐れみの情の深い人はそれでも憐愍感を充足させて滿足に思ふであらう。これは衣服を一例にとつたまでゞあるが、その他の文化的施設に於ても同樣なことが云はれる。憐愍の感情を充分活かし切るところに急激な文化的發達は望まれない、それどころか時として文化の否定となり生活の否定とさへならなければ止まないだらう。

憐愍の感情を生かし切ることが生活の否定とさへなることはかの微生物に對する愛に於て言ひ及ぼしたのであるが、しかしそのやうな愛深き人は、犧牲を極少にした生活の聖とき範例を實地に見せて世界の葛藤を調和して貰ふために、小さき犧牲は忍びつゝも生活を否定して貰つては困ると云ふことは前述した通りである。しかし、憐愍の感情を極度に高調する時には人間は又別な方向から人生の否定にすゝむのである。

妻を有たない孤獨な男がこの世に存在する限りは憐愍感を全く生かす人はその男をして羨望の苦痛を味はしめず、同じ淋しさを味はふことによつてその男の淋しさを慰めようとはからずにはゐられないだらう。かやうに高まつた憐愍感が世界全般にひろがる時、孤獨なる男の一人でもこの世に存在する限り何人も結婚するものはなくなるだらう。しかしこの時人生は全然否定せられたと同じ結果になるのである。これで果して好いであらうか。或人は倉田氏と同じやうに『同情のために眞理を曲げてはならない』と冷酷に云ひ切らなければ人類は滅亡する他はないと云ふであらう。

自分は倉田氏の戯曲「父の心配」並び、最近の氏の論文集『靜思』に於て氏の最近思想の傾向を受取つた。それは『同情のために眞理を曲げてはならない』といふことと、『罪なき生活をのぞんでゐた今迄の消極的生活から、些少の罪は許しながらも使命若しくは天分を生かしきる積極道に移りたい』といふことである。玆に自分は眞理とは何ぞや、使命若しくは天分とは何ぞやと云ふことを一層精しくその內容を調べて見たいと思ふのである。憐愍感よりも一層貴いと云ふ眞理とは抑々何ものであるか。憐愍感よりも一層貴い使命（論文では乞食を救ふことよりも貴いらしくあらはしてある美術家が繪を製作する使命）とは何であるか。そして人類に於ては憐愍感を生かすといふことは眞理ではないのか、又それが使命ではないのかと云ふことをも一緒に考へて見たいと思ふのである。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

九、使命に關する考案

別の論文で自分は一燈園の『たのまれたこと』に奉仕する態度と、使命を自覺して使命にいそしむと云ふ態度とは別異なるものではない、『たのまれる』といふ事は接觸的に少數の隣人から『たのまれる』だけではない、法界からも神からも見えぬ形式でゞはあるが常にたのまれてゐる。これこそ使命であり、使命にいそしむのは、法界からたのまれた仕事に奉仕するに他ならないと書いたことがある。この事は西田天香氏が、綾部へこられた序でに自分の家へ立寄つて下さつた時にお伺ひしたら、氏は『接觸的にたのまれただけがたのまれたのではない、常にお光からの聲を自分もきいてゐる。だから接觸的にたのまれたことでも自分は必ずしも實行しない。又直接たのまれない所へも自分は行く。唯使命と感ずることが實は一つの自分の執着であつて、本當にお光から賴まれたものでないかも知れないから一旦一切を捨てゝ、お光に委せきつた後にお光から來るものを從順に受取つた時に、本當にたのまれたこと、即ち本當の使命を機緣が熟した時に遂行することが出來るやうになると思ふ。』と云ふ意味のことを答へて吳れられた。かゝる完全に一切を捨て切ると云ふ方法によつてお光から來る攝理を從順に受取ることによつて自己の使命を見出すと云ふことには何だか自分には神的な根據があるやうに思はれる。一燈園に入園すれば、畫家は先づ畫筆を投じて隣人の手近かなる仕事に奉仕し、繪を描くやうにたのまれた時はじめて畫筆をとるやうに勸められる――と云ふことを倉田氏は恰も「使命に竭す生命の無駄な浪費である」かのやうな口調をもつて、その賛成しがたきことを「靜思」の中で述べられてゐる。その畫家が眞に畫家たるの使命を有つかどうかはわからないが、彼が眞に畫家たるの使命を有するならば、「父の心配」に於ける順作の如き攝理を信ずる人は攝理の眞に適當なる時期に於て、その使命が熟して來、その使命を遂行し得るやうに適當にたのまれるに相違ないと思ふのである。畫家の使命を有つ人が、畫筆を投じて隣人にたのまれたる些末なる一見價値なき仕事に奉仕すると云ふことは果して倉田氏の想像せられるやうに價値少く、又悲しむべき事だらうか。畫家の製作の數は減ずるだらう。しかしこれは重大なことではない。畫家は一旦自分を捨て切つた瞬間に、次に機會が來て繪を描く時に一層價値ある繪を畫き得るやうにその心境が內的に高められはしないだらうか。この方が一層重大なことである。自分はその畫家が一旦自己を捨て切る

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

ことによつて淸められ、高められ、そして數少い、がしかし價値多い繪を書いて吳れることを望む。しかし隣人に對する些末な手近かな奉仕が何時終るかわからないし、或は一生さうした奉仕にたづさはることによつてその畫家は一生涯一枚の繪も描き得ないかも知れない——藝術を愛好する人にとつては、かゝる如きは淋しき極みであるだらう。しかし自分はどこまでも攝理を信ずる。もしその畫家が一生涯畫を描くことをたのまれなかつたら、自分はその畫家が攝理を司る者から繪を描くことをたのまれてゐないのと信ずる。即ち彼が畫を描きたいと望んだのは彼一個の執心であつて、攝理を司るものから命ぜられた使命でなかつたと信ずる。しかし自分は倉田氏の使命がその思索や、藝術の製作にあることを信じ、體質の上から云つても、攝理を司る者が氏に對して他の仕事をのぞんでゐないことを信ずる。自分は氏の如き思想家が人類に代つて思索して吳れることの有難さを思ひ、氏の如き戲曲家が人類ドラマを製作して吳たるにとを感謝したいと思ふ氏が使命の遂行を力說せられるのは氏自身並びに同じき類の人達に必要なことではある。しかし、攝理を司る者が命じてをらないものを、迷執によつて、誤つて使命なりと感じて努力してゐる多くの人達にとつては、一旦一切を捨て去つてお光の命ずる儘に、攝理を司る者にたのまれる儘に奉仕の生活を送つて行くこそ使命を最も從順に發見する方法であらう。こゝでは神からたのまれたこと(使命)と、隣人から手近かにたのまれたこと(奉仕)とは一致する。

十、『美』に對する一考察

美に對する感覺の上から『都踊はこの世に存在しても好い』と倉田氏の云はれたやうな言葉は、又單に美に對する感覺の上から、『露臺の上で秋の月が悲しげに冴える時、娼妓がその不運な運命を男の膝にすがつて泣いた』と云ふやうな情景についても、亦この世に存在しても好い美しい情景だと云はしめるだらう。露臺と月と、女の涙と、不幸な運命と、それらのある組合せや配合は吾々に「美なり」と云ふ感じを起させる、この「美」は娼妓の不幸な運命が消滅してはもう吾等に感じられなくなるだらう。けれども、それが吾等の美態を滿足させて吳れたからとて、自分は娼妓の不幸な運命を祝福する氣にはならない。かゝる運命をこの世に存在しても好いと云ふ氣にはなれない。この點に於ては西田氏に自分は同感する近代に於ては「美」に對する感覺が著しく病的になつたことを感ずる。自分はこの論文を綾部に於て半分書き、その後半を

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

ある用事をたのまれて大阪にいつてから綴つたのである。自分は青々こ露に濡れた樹草が霧を破つて輝き初めた朝日に映えてゐる光景を汽車の中から見て『美なり』を感じずにはゐられなかつた。自分の乘つてゐる汽車は龜岡附近から保津川に沿うて下つたが、岩を避け惑ひながら美しい波をたて、流れる水に釣糸を垂れてゐる漁夫が繼布だらけの短衣をきて、暑いのでそれも無雜作に半裸體になる迄身體から片寄せて、脛を溪流にしたしながら、水を一心にながめてゐる光景を亦美なりこ感じずにはゐられなかつた。繼布だらけの短衣、銅色の日にやけた皮膚、それ自身だけで見ればそこに何等の美感も起らないやうな粗末なものばかりだが、環境この調和や、周圍このコントラストの上から見れば、それが驚くべき「美」の要素をなしてゐることを發見した。それは實に文化の峻しい發達は見なくこも「美」は存在し得ることの有力なる證據であつた。自然は貧しき内にも技巧なき所にも美の世界を創造して見れてゐるのだこ自分は感じずにはゐられなかつた。近代の概くの人は美を個々のそれ自身の美しさにもこめようこする傾向が强い。例へばある人は、個々のダイヤモンドの美しさに美をもこめようこしてゐる、或る人は着物それ自身の品質の上等や、柄や色彩それ自身に美をもこめてゐる。その癖その個々のものが如何なる環境に置かれ、如何なるものこの對照をなす時に、調和した美が得られるか知らうこしない者が多い。美しい郊外や田舍の自然は破壞せられて、不調和な洋館が建設せられてゐることを自分はたびたび眺める。洋館はそれ自身に美的かも知れないが、日本式の山や原野や郊外に對しては、日本の古式な草屋のやうには調和した美をみこめることは出來ない、自分は丹波の低い山々に圍まれた小さな町に二三年住んでゐて久し振りに大阪の街に來た時に、文化的發達をこげたる大阪の街は未開の丹波の山間の小さな町ほご美的には感じられなかつた。自分は所謂文化的建物たる洋館がそれ自身美的であるかも知れないこ云ふことにもある疑ひを持つてゐる。自分は今度たのまれて中之島のある宏壯な建物たる大阪控訴院の中へ這入つて見たが、あの金のかゝつた部厚な煉瓦壁の建物は、外から見ても内から見ても冷たい感じこ無情な感じこ索漠たる印象こを受取るに過ぎなかつた。辯護士附屬室に控へてゐた自分は「こんな所に半日も睨こ待たさては堪らないな」こ云ふ感じに打たれた。これはこの建物の用ゐられる目的から特殊の構造をも持つてをり特殊の印象をも受けるのであらうが、全體に於て、文化に就て進歩してゐる大阪は、未開の丹波の山中ほご美的ではないここは否定し得ない。その甍は埃にまみれて灰色をしてゐる。その空氣はすつかり煤烟のために濁つてゐる。人々は重濁

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

した灰色の中に住んでゐる。街には喧騷な電車や自働車の非音樂的な響が絶えない。東洋のヴェニスと稱へられた水の都もその河はまるで薄墨を流したやうに見える。唯、個々の人間は田舎の人よりもそれ自身美しいと感じられる着物を着、化粧してゐる。人は此處では全體の調和した美を失つて個々の美を獲得したやうに見える。個々の美を獲得するために全體の美を犧牲にして好いものだらうか。自分は疑はずにはゐられぬ。否、寧ろ否と答へたい。個々が美しくて、全體が又美しい調和を保つてゐると云ふことは如何に望ましい事だらう。しかしそれが得られないとしたら、個々は素朴のまゝであつても自分は全體としての調和した美を求むる。人は時には優美に飾られたものよりも素朴なるものに美を感ずる。素朴なる個々のもの、加工の少い個々のものの中にも、美を認めることは出來ると思ふ。否、却つて素朴なるものは低い趣味で飾られたものよりも、個々それ自身の美に於ても優つてゐる場合もあると思ふ。それ故全體の空氣や川の流れを濁す程の犧牲を拂つてまでも、文化的美を求めねばならぬことはない。これは唯外的な感覺的な美について云つただけであるが美の對照的要素に精神的なるものを加へれば一層この事は明瞭になると思ふ。美は個々の單純な色彩や、形の美から始まつて、次第に複雜な色彩と色彩との組合せや、形と形との組合せや、さま〴〵な色彩とさま〴〵な形との調和の美にまで進歩する。しかしこれで美の進歩はもうおしまひであるだらうか。それは色と形と更に心とのさま〴〵な組合せに進歩しないだらうか。自分は着けてゐる人の心の醜さによつて、色と形とだけの上では美なるものが醜く感じられた經驗がある。黄金はそれ自身に於て美しい色澤をもつてゐる。それで造られた指環や腕環は形に於ても美しいだらう。しかしそれは低劣な心の成金の虛榮心から用ゐられると自分は美しいと感じることは出來ない。木綿のくすんだ色の着物はそれ自身に於て美しくないだらう、しかし西田氏の如き人が貧しき人に對する憐愍感を生かすために、さうした質素な衣服を身につけられる時、それが質素であればある程自分は色と形と精神とのコントラストの上から美しいと感じずにはゐられない色や形の對照や交錯の上から今迄形造られてゐた美は、更にそれが憐愍感の如き精神に對する配合や對照の上から感じられる美にまで進化するものなることを信ずる。かかる精神的要素との配合の上から生まれる美は人間本有の憐愍感を犧牲にすることなしに、又文化の進歩を害ふことなしにいと高き美に迄のぼり得る。しかるに文化の進歩によつてのみ得られる美は、概ね憐愍の感じを犧牲にすることなしには得られない。――これは既に屢々繰返してのべた處である。憐愍道は文化に逆行し、文化は憐愍道に逆行する。しかし憐愍道は高き種類の美に逆行しないことを自分は信ずる。憐愍のあの所そこに必ず聖地があり、美の泉があるが」如何に複雜な色彩や形式の美的な技巧的な配合もそれが、憐愍の如きいみじき精神美によつて組合はされない限り、その美は外的であり、乾燥してをり、うるほひのないことを自分は感じる。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

十一、結論

自分は玆にこの論文を草した目的の大半を終つたやうに思ふ。それは憐愍の感情を蹂躙らなくても美のあり得ること、並びに憐愍感といふ一大眞理の前には他の一切の眞理らしく見ゆるものを曲げても好いと云ふことである。『同情のために眞理を曲げてはならない』と倉田氏は云はれたが、自分は憐愍と云ふ感じは宇宙の最高眞理であるが故に、これを生かすことなしに他の眞理が生きるものでないと信ずる。法界は一如であり、主客な本來一如であるが故に、一切他の運命に關して自分に對するやうな懸念を持つのが憐愍である。それは宇宙の當體の本性より滲み出た「自他一體感」そのものであるが故に眞理である。これを曲げても好いやうな眞理がどこかにあるだらうか。自分は否と答へざるを得ない。

「宇宙の進化」と云ふことが眞理であり、そのためにはある者は幸福な運命を恵まれ、ある者は不幸な運命に掟てられるといふことも亦眞理ではあらう。しかしそれは差別觀に立つての第二義的眞理であつて無相不二なる宇宙の當體から來る第一義的眞理ではない。無相不二なる眞如の當體から見れば、優强者も劣弱者もなく、進化も退化もなく、從つて一切現象は洞然として平等である。玆では眞理は優强者の味方でもなく、劣弱者の味方でもない。劣弱者が優强者のために虐げられ犧牲にせられてもよいなどと云ふことは勿論ない。一切は平等に愛せられ憐まれる。しかし事實に於ては人は無相不二の世界に坐しながらも差別の世界に生活してゐる。されば吾々は必要的に無差別的の自他一體觀によつて劣弱者にも憐愍と愛とを感じ、しかも尚現象世界に於ては小なる進化にとぼしい生命は、より大なる進化をとげたる生命の犧牲になるの已むを得ないことを嘆ぜざるを得ない。しかし如何なる生命をも犧牲にするを欲せざる憐愍の感情は時に小生命の犧牲を認容するが如き差別世界の眞理よりも一層本質的眞理であることを自分は信ずる。憐愍の情のために眞理を曲げてはならないと倉田氏はいつたが、自分は他の幾多の差別世界の眞理よりも、憐愍の情は一層貴い眞理なることを信ずる。そして物質的表面相の進化を目的とするが如き現代の文化主義は、その内容に憐愍感の如き精神的要素を美の配合に取り入れることによつて、この本質的世界より泉み來る自他一體感を殺さないで、尚より高き文化主義に進歩し得るものなることを信ずる。西田氏の生活の如きはかかるより高きいい文化主義に一致するものであつて、決して文化に逆行するものではないと思ふ。

——(大正一一、八、二五)——

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

千代ちゃんの一錢

松下吉衛

ある町の道ばたに、あめ屋さんが店をはつてゐました。ぶつかきあめ、きりあめ、金太郎あめ、それから、てつぽう玉だの、赤、青、黄色、紫と色々きれいに彩(いろ)づたのが、見てもおいしさうに、列べてあります。

子供たちは大ぜいその前に起ちふさがつてゐました。中には、あれがうまいの、この方がなほうまいのと、言ひ合つてゐる子もありました。

さういふうちにも、『賣つとくれ、金太郎あめ二錢。』『おれには、ぶつかきあめ一錢』『わたしにも、ぶつかきあめ頂だい』など、、引つきりなしに賣れるので、あめ屋さんは目がまはるやうな忙しさです。

すると、先程から隅の方にうづこまつて、あたりをじろ／＼ながめてゐた、よくない身なりの男の子が、あめの入つてゐる箱のガラスぶたをあけたかと思ふと、いきなり手を中へつきこんで、あめをつかむが早いか、逃げようとしました。

『あれ、どろぼう！』と、誰かゞどなつたものですから、あめ屋さんは、走つて行つて、ぢきその子をつかまへてしまひました。

『こんちく生め！ 太いがきだ！ さあ來い。巡査さんとこへ、ひつぱつて行くから。』

かう言つて、あめ屋さんは、その子のいりくびのところをわしづかみにひつつかんで、ずん／＼引きずつて行かうとします。

男の子は、泣きごゑを立て、、

『をぢさん！ もう決してしないから、かんべんしとくれよ！』と、あやまりながら、切りに身をもがいてゐます。

このさわぎに、近所にあそんでゐた子供たちや、通りがゝりの人などが、大ぜい黑山のやうに、そのまはりに集つて來ました。

そのなかに、千代ちゃんといふ、學校へあがつたかあがらない位の、涼しさうな眼をした女の子がゐました。しば

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

らく、もぢ〳〵して、この樣子を見てゐるやうでしたが、いよ〳〵かくごをきめたといふおももちで、つか〳〵とあめ屋さんのそばへよつて行つて、

『をぢさん！　どうぞ、かんにんしてやつて頂だいな！　わたしお金を一錢もつてますのよ！　これ、をぢさんにあげるわ。その代りこの兄さんのもつてるあめを、わたしに下さいな。ね！　いゝでせう。』とやさしい子供々々したこゑだけれど、きつぱり言ひました。

あめ屋さんは、思ひがけない女の子の言葉に、あつけにとられたといふ風で、ほんのしばらくでしたが、ほんやり立つたまゝだまつてゐました。

でも、すぐ笑顔になつて

『孃ちやん！　なに、お金なんかいりませんよ。この子もかんにんします、あめもくれてやります。』と、千代ちやんの頭をなでながら、やさしく言ひました。

男の子は、この時、涙を一ぱいためた眼で、千代ちやんを、ぢいつと見入つてゐました。（終）

◇ノートから　●本號に惠まれた西田博士の論文は京都一燈園の夏期托鉢會で博士のなさつた御講演の筆記であります。谷口兄に大本敎の方とか承つてゐます。『文化生活と懺悔道』は私達にとり暗示に富んだ貴い文字だと存ぜられます。●玄光社だより　八月五日の例會には小林鐵太郎兄の『小作問題』に關する二時間餘の講演があり、續いて質疑應答に議論の花を咲かせました。九月のには久保田明光兄が話して下さる筈でしたが　お差支のため又も小林兄を煩はし『日本工業の沿革』について世間にまだ餘り知られてゐない貴重な研究の發表をしていたゞきました。玄光社の趣旨を一度本誌に公表しましたら共鳴の方が續々入會申込をして下さる。近く同人連絡の方法等御敎示を願つて具體化したいと思ひます。此度玄光社パンフレット第一册として『現代の經濟生活と懺悔奉仕の道』（松下吉衞著、代價廿錢）が出ましたから、御批正の勞をおとり願ひたい。玄光社に御申込あれば御送本申します。パンフレットは引續き出して行くつもりです。●表紙題字は光明皇后（藤三娘）御筆『樂毅論』（天平十六年十月三日）の中からいたゞかせて貰ひました。これは前號前々號のものと共に園田寬氏令夫人の御厚情に依つたのです。特に記して謝意を表させて貰ひます。●これまで本誌の發送は兎角おくれがちで、濟みませんでしたが、此號から實際の發行日を早めて、その月のは その月の初に皆さんの御手許に屆くやうに致しますから惡しからず。又、記事內容等について御意見御所望がおありでしたら、どうぞ下名まで御申越の勞をおとり下さい。それから、讀者諸賢と編者側との誌上での連絡も喜ばしいことゝ考へられますから、これについても御敎示を給はりたい。（東京市外戸塚町上戸塚五八〇玄光社內松下）

惡魔の群

第一幕（前號よりのつづき）

吉田暎二

僧一同——おゝ。

丙——危險だ。早く逃げなくては。さア乙殿。丁殿。早く。

丁——お師匠樣は。

丙——（既に上氣して）早く。早く。

（行かうとする。老僧出る。）

老僧——峠が敗れましたか。

乙——もう敵は町の中に入つたさうです。

丙——早くお逃げにならないと危險です。すぐ……

老僧——逃げるにも及びますまい。

丙——然し敵がもうやつて來ては……

老僧——いくら敵でもこの町の人を悉く殺すのが目的(めあて)でもありますまい。大丈夫ぢや。もつと氣を靜めたがいゝ。彼等の望む處は敵の城下の人命でなく、この城なのだ。土地なのだ。而してこの城下の支配なのだ。又譬へ逃げるにしても、今出るのは損ぢや、敵の兵士達は、勝に乘じて今は昂奮しきつてゐる。何をされるかわからない。氣のはやつてゐる時は少し氣にさはるものは皆殺して終ふものだ。それに惡い事には、勝利に醉つて面白半分と云ふ心が出て來るから。

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

丙——でも、さう悠暢にしては居られません。彼奴等は、行く路に敵の人民を一人も殘さない主義ださうです。

老僧——いや然し、手向しないものを殺す事は人には出來ないものだ。人は手向しない人を見ると自分の事を考へ出すものだ。わし達は本堂へ行つて祈らう。人々に禍のふりかゝることが幾分でもへるやうに。

丙——ではどうしてもお逃げになりませんか。

老僧——逃げる必要がない。わし達は、唯こゝに居て慘しいことを見るのがつらく、かなしいだけぢや。而して佛樣の御怒りを恐れるだけぢや。

丙——（云ひ惡くさうに暫くもじ〳〵した態）では、私だけ、逃げたう御座います。……私は怖う御座います。（手をつく）

老僧——逃げたければ逃げらるゝがいゝ。それを止めるだけの力はわしには無い。幸も禍も、わしの力ではどうにもならない事なのだから。

丙——有難う御座います。それでは御免下さい。御師匠樣の御安泰をお祈り致します。

（僧丙去る。）

老僧——あゝ、わしもあなたの無事を祈らせて貰ひませう。

老僧——不安を感じられる人は皆逃れるこいゝ。怖いのは誰も彼も同じ事だ。逃げて惡い事もなければ、止まつてよい事もない。

（誰も出ない。）

乙——丙殿は、何こ云ふ臆病なのだらう。御師匠樣やお寺を見捨てゝまで自分の命が助かりたいのか。

老僧——責めてはいけない。誰も彼も自分の身から割出して考へるものだ。平常（ふだん）はそれがつゝしめても非常の時にはさうは行かない。だから、それは人間同志に責められない。丙も今は、何も彼も考へる餘裕のないまでに怖れ戰いてるるのだ。冷靜になれば今出て行く樣な人間ではない。怖れが冷靜を奪つたのだ。その爲めに識（し）らず〳〵に自分の本心にない事をするのだ。それが人間だ。靜かな心でゐられない處が人間だ。佛樣の御前にひれ伏さなければならない譯も其處にある。わし達はもつこもつこ跪き祈らなければならない。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

（この時一層外の混亂が非道くなる。男女の叫聲など聞える。）

甲——おゝ、おそろしい叫び聲だ。おゝ、惡魔。さぞ澤山の人が殺されるで御座いませうね。（不安の思入）

丁——まさか、かうならうとは思ひませんでしたね。お城主達は何うなされたらう。かう早急ではお城の固めも間に合ひますまい。

乙——勿論落城でせう。

老僧——恐しい事だ。人が人を殺す……（考へる）お城主方の命はおあぶない事だ。もし捕虜にでもなつたら。どうか逃れさせて上げたいものだが。

甲——さようで御座いますね。

老僧——お城主方許りではない。故なくして害され様とする人は悉く逃げてほしいものだ。而して安全な地に落付いてほしい。わしには敵も味方もない。爭ふ人を氣の毒に思ふ許りだ。然し人を害する者はにくみたい。にくまずには居られない。けれども惡んだからと云つて彼等と爭ふわけには行かない。爭ひを引起す惡み、それ自身が既に吾々の心に萠ざしてはならぬものだから。（間）。彼等も報いられる時があるだらう。自分達はそれを見るだけだ。意氣地がないと思はれても彼等の様な佛の光に遠い人々に對する自分達の最上の務は祈るより外に仕方がないのだ。幾分でも、惠まれた境涯への發心を思ひ至らしめる様に祈ることそ彼等に對する自分達の務めなのだ。等しく降り注がれる佛の光の、より大に、より豐かにと彼等の上に祈るだけなのだ。

丁——もう一度讀經致しませうか。

老僧——あゝさうしよう。誰も彼もの上に。而して殊に敵の人々の上に。（間）無月の夜だから、さぞ同志打ちもあらう。恐しい事だ。南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛。

（老僧入る。僧一同あとへつゞく。甲だけのこり、あたりを見る。外の騷音雄叫び、悲鳴喊聲増々烈しくなる。）

甲——（手紙を又出す。ぢつと見る中に漸次不安つのる。）あゝC子はどうしたらう。あの騷ぎの中で、……まさか私を待つてゐるまい。しかし（間）それにしても……どうしたらう。無事でゐるかしらん。それとも……それとも……おゝ恐ろしい事だ。そんな事はないにきまつてゐる。しかし心の何處かで、不安は始終私語を續けてゐる。あゝ……行かなくてはならない、行かなくては………

（ぢつとしてゐられない様にいらくする。騷音は依然として續く。甲はますく夢中にそちこちを駈け歩く。早く幕を下ろす。）

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

第二幕（第一場）

第一幕と同じ夜。舞臺の奥へ左手から大通りが續いてゐる。中央から右手は或る家の築地の土塀、門が締つてゐる。

右手は町家が奥へずつと並んでゐる。その上の遠くの空は赤く見える。兵燹である。舞臺一面には物凄い赤い光が滿ちてゐる。

（幕が明くと兵士達が入り亂れての暗鬪。長刀や劔刄が時に閃く。物凄い雄叫びや、氣合や、負傷して倒れた者のうめき聲やが、太刀音の間を縫つては流れてゐる。暫くしてその亂鬪の群は散り〴〵に姿を消す。）

暫くの間。

C子、恐れわなゝきつゝ、あたりに眼を配りながら急ぎ足で出る。十七八の美しい娘。

舞臺の中央まで來た時、何處ともなく鬨聲が響く。C子はびつくりして、突差に右手の家の塀際にぴつたりと體をくつつけて、おびえたものゝ樣に忍ぶ。と、一群の兵士が、他の一群の兵士や町人達を追つて舞臺を横切る。町人達は皆立退きの姿である。町人の中の女達は追ひかける兵士の爲めに捕へられ、連れて行かれる。女の悲鳴と兵士の荒い聲がいつまでも續く。その後暫く靜寂。

と、僧甲出る。これも恐れ戰き乍ら、氣づかはしげに周圍をすかし見乍ら來て、C子の塀際に恐ろしさに蹲つてゐるのを見當らずに行き過ぎ樣とする。眼ばかり見張つてゐたC子は、甲の通るのをすかし見ると、口もきかずに、いきなり、甲に飛び付く、甲は驚いて逃げ樣とする。）

C子――甲樣。甲樣……

（とあはてゝ引止める。甲やつとわかつて。）

甲――あゝ、Cさんでしたか。私は又、誰か……敵の兵士達かと思ひました。すみませんでした。……よくこの騷ぎの恐しさに出て來られましたね。

C子――でも、お手紙を上げてしまつたのですもの。こゝまで來るまでに、鎧姿の武士達に何人となく出會ひました。隨分怖しう御座いましたわ、でも來て戴く樣に手紙を上げてしまひましたから、どうしても來なければならない、もしあなたがゐらしつた時に濟まないと思ひましたの。あれはお讀みになりまして？

甲――讀んだから來たのです。みんなはお勤めに本堂で行きましたから、その留守に忍んで來たのです。例へこの混亂の

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

中でも、私はあなたが必ず來るこ信じてゐました。それに暫く會ひませんでしたものね。

C子――私ほんこにお會ひしたくつて、あなたの方の御都合も考へずに手紙を上げて了ひましたの。惡う御座いましたわね。

甲――いゝえ。この戰の中を一人で歩いてゐるあなたを思ふこ、一寸だつてぢつこしてゐられませんでした。早くあなたの顏を見て安心したかつたのです。戰爭のおそろしさよりも、あなたの方が、私にこつて力强よかつたのです。……それに是非早く會つてあなたにゆるして貰はなくてはならない事もありましたから……

C子――何んですの。

甲――私達は暫く會はれなくなりさうです。

C子――ご、ごうしてですの。あなたは、いつか、二人はいつまでも離れずに居ませうこおつしあつたではありませんか。

甲――(一人言の樣に)私は苦しい。……Cさん、私はその言葉の通りを今でも願つてゐます。私の本心はいつもその言葉通りです。然し私達の戀は破られさうなのです。

C子――でも、お師匠樣にお話になつたのでせう。

甲――私の弱さはまだお師匠樣こお話しない前に、既に私達を亡す樣な事になつてしまつたのです。

C子――では、まだお話にならなかつたのですか。

甲――私は、それだけ强くなかつたのです。私はお師匠樣の、その事をお聞きになつて苦しまれるお心を知りすぎてゐましたから。おゆるしにはなるでせうが。

C子――では誰が、私達の事を知つたこおつしやるの。(こせき込む。)

甲――或る人が私達の事を知つたのです。而してそれは他の二三人の人の前で喋られたのです。私は或る行爲を隱れて行つてゐたこ云ふ事に對する猜疑や排斥のけはしい眼に出會ひました。私は今あなたこの戀を投げ打つて、お師匠樣の前に、佛樣の前に、ひれ伏さなければならないこ思つてゐるのです。

C子――あゝ、(こ泣く)……あなたは私をほんこに愛して下さらないの。

甲――ほんこに愛さうこ思ふから斯う云ふのです。

C子――でもあんまり手前勝手ですわ。(泣く)

(この時又あたり騷しくなる。二人思はず、抱き合って塀際に駈け寄る。右手から左手へ、兵士の群さ、それに追はれる町の

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

人々の群の混亂と騷音が二人の前を過ぎて行く。あとに二人の抱き合つた姿のみが殘る。暫くの間。二人靜かに歩み出て、)

C子――もう來ないでせうか。(とおびえた聲)

甲――(あたりをすかして)もう來ますまい。――Cさん、私の云ふ事をよく聽いて下さいね。私はあくまでも、あなたから離れたくない。私はあなたから離れゝば命を取られたも同然です。……けれども、道があります。佛の道があります。道に叛いたものゝ行かなければならない道もあります。私は隱れてあなたを戀した。その罪を擔はなくてはなりません。この隱れた罪を今あばかれた事は、私にとつては佛樣の加護による事かもしれません。私はこの罪を擔つて踏み迷つた路を正道へと踏み歸らなくてはなりません。その爲めに、私はあなたから離れたいのです。暫くの間でも、溫かい心で話しかけて吳れたあなたには、私の一生の涙でさへ、御禮も出來ないのですが。(泣く)

C子――(泣き乍ら)それで、それで私はどうなりますの。

甲――私は苦しい。どうしていゝかわからないのです。私は私の方の解釋しかつかない。あなたも共に生きる道はないものか。……おゝ、何と云ふ矛盾だ。何故に眞實は二つあるのだ。戀と道と……なぜ一方を捨てなくては一方が立たないのでせう。(漸次激して來る)私にはわからない。何もわからない。Cさん。Cさん。ゆるして下さい。私にはわからなくなつたのです。……私はあなたに會つて斯うして話してゐる間に、何うしてもあなたから離れる事が出來なくなつた。そゝそれは、眞實だからだ、戀が眞實だからだ。

C子――甲樣。誰がそれを云つたのです。誰が私達の事を知つて居たのです。

甲――私は云ふまい。……私は云はない。……人を責めてはいけない。それだけの資格があるか。……考へれば私がわるいのだ。

C子――何が御惡いの。

甲――隱してゐた事がです。……おゝ、ゆるして下さい。(と狂氣の樣に天を仰いで手を合はせる。)私は責められない。(と獨言の樣に云ふ。)

C子――甲樣。なぜですの。その云つた人を私に敎へて下さい。ねえ、甲樣。

甲――いゝ。もういゝ。私は云へない。私はそんな事を云ふのではなかつた。私は、あなたを何と云つて慰めていゝのか。

C子――私はあなたのお心持はわかりますわ。離れてゐろと仰しやるなら、又それがあなたのお爲めになる事なら、喜んで離れても居りませう。……けれど、その云つた人は誰ですの、私逹の運命をも考へないで、そんな事を云つた

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

人は。
甲――おゝ、運命。さうだ、人の運命だ。しかも貴い運命だ。あの人は運命の破壞者だ。運命を恐れない人だ……（又亜ひかへして）おゝ私にはせめられない。
（此の時又もあたり騷しくなる。甲、C子共に驚く。）
甲――あッ、又來た。さアCさん早く逃げませう。
C子――ごうか、ごうか、その人を云つて下さい。私には心あたりもあるのですから。
甲――（C子を促さうとしたが）えッ。心當り？
C子――あなたが、おつしやられなければ、私が申しますわ。その人はお寺の乙樣でせう。
甲――（驚ろいて）えッ。ごうしてごうしてあなたは知つてゐたのです。ごうして……
C子――やつぱりさうでしたの。
甲――さうです。今日一寸した議論から私が乙殿を惡魔こ罵つたのです。罵つた時は夢中でしたがすぐ後で悔いました。けれごも乙殿は怒られて、私達の事を皆なの前で喋つたのです。
C子――まあ、にくらしい。きつこ乙樣は私の事を、私達の事を惡んで居らつしやるんです。
甲――いゝえ惡んでは居られないのでせう。あの人は熱しやすい人ですからね。
C子――いゝえ。いゝえ。きつこ惡んで居るんです。私はくやしい。……私はあなたにお氣の毒ですわ。私の爲めにあなたまでが、そんな目にお會ひになつて。
甲――ごうしてです。……乙殿はあなたを知つてゐるのですか。何かあつたのですか。……又なぜあなたは乙殿を知つてゐるのです。
C子――（泣く）あゝくやしい。ほんこに惡魔だ。ほんこに乙樣は惡魔だ。（激して來る）
甲――何うしたのです。え？
C子――乙樣は、……私を戀していらつしやるのです。
甲――（打たれたものゝ如く）えッ。乙殿が……あなたを戀して……
C子――私はあの方が、御自分のお心を私にお話になつた時、隨分強く侮辱しました。
甲――乙殿はごうしました。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

C子――乙様はすつかり萎れておしまひになりましたの。私はそれを見てお氣の毒だと思ひました。しかし、それ位強い侮辱がかへつてあの方自身の本心に眼覺めさせる事が出來ると考へました。

甲――お丶、Cさん。

C子――それがいけなかつたんですわね。その時默つて御歸りになりましたが、あの時の怨みを覺えて居らつしたのでせう。

甲――私の事はその時もう、知つてゐたのですか。

C子――御存じだつたのです。前に森の中にあなたと私が居た時、御覽になつたのですつて。

甲――あ丶。

C子――ずつと前から乙様は私を戀してゐらつしたと、その時仰しやいましたわ。而して……而してあなたの事を隨分非道く……

甲――（怒つて來る）お丶……何と云ふ下劣さだ。何と云ふ陰險さだ。私は人を責めてはいけないのかもしれない。けれども、これがごうしてじつとしてゐられやう。Cさん。もう私はあなたから離れようとはしません。私はいつまでもあなたと一緒です。いつまでもあなたは私の命です。私はもう私の戀の成就するまで、あなたと二人で戰ひませう……お丶戰ひだ。苦行だ。いやしきもの達に虐げられてはならない。あなたも強くなつて下さい。佛の敎ふる道と戀と、この二つが共立出來る爲めに苦しみませう。（情激して）お丶、佛様私達の惡魔奴との挑戰の力をお守り下さい。

C子――甲様。……いつまでも、二人で行きませうね。

甲――お丶。

（二人固く抱擁する。一寸の間。この以前から周圍の騷音ます〳〵烈しくなり、この時町人達と敵兵共の混亂した群が雪崩れて來る。敵兵共は、唯女のみを捕へようとする。それを支へ様とするもの、取返さうとするものは、或は追はれ、或は斬り倒される。甲、C子もこの亂鬪の中に卷込まれて、努めて逃げ様とする。悲鳴、罵聲、叫喚が怖ろしく響く。敵兵の一人C子を捕へ様とする。甲、その間に入つてその兵士と爭ふ。）

C子――甲様、甲さまア。

甲――（爭ひ乍ら）Cさん、はやく逃げて、逃げて……………

（C子、やつと逃れて右へ駈け入る。敵兵は逃さじと後を追ふ。甲は又その後を追ふ。敵兵の他の一人も亦甲の後に續いて入る。

後に舞臺にはまだ、凄慘な奪略、殺人、爭鬪がつゞき、いまはしい騷音は渦を卷く。）

暗轉

（暗黑の間にも人々の叫聲、騷音は物凄く續いて聞える。
次の道具が出來ると漸次その騷音が低く小さくなつて終に消える。
而して舞臺明るくなる。
但し廻舞臺を利用するも、暗黑の時間は相當長くなくてはいけない。）

（第二場）

第一場の終りに近き頃と同時刻。
同じ城下のB子の小さな住家。
正面は店で舞臺の奥を向いてゐる。（丁度見物は店の奥から見る事になる。）水菓子、駄菓子などが並んでゐるのが一寸見える。左手は往來に面してゐる壁で窓がある。窓の外は往來で奥へ通つてゐる。右手は障子で次の部屋に通ずる心。窓の戸、店の戶、共に閉めて、締棒がかゝつてゐる。

（舞臺が明るくなると、A子、B子、行燈の傍で火鉢を圍んで話をしてゐる。B子は五十近い。A子は廿歲を少し出た位の大人しさうな娘。）

A子——もうさつきから何度あの聲が聞えたでせう。
B子——みんな逃げる人達が虐られるんだね。
A子——では、もう逃げられもしませんわね。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

B子——もうぢつとしてゐるより仕方がないよ。而して様子を見てそつと逃げられたら、逃げるんだね。それまでは食べず飮まずで居なければならないかもしれないよ。

A子——まあ。

B子——私達が不運だつたんだね。今に敵兵達も家々へものごりに來るかもしれない。それが私は一番こはくてならない。

A子——さうなつたら、うちに有るものを何でもやつてしまつたらいゝではありませんか。

B子——それで歸つて呉れゝばいゝがねえ。

A子——だつて何も手向ひしないものゝ、命までも取らうとはしないでせう。

B子——ごうだかわからないよ、それは殘虐な人達なんだつて云ふからね。私達は殺されるよりもつと恥しい目に會はなければならないかも知れないと思ふ。

A子——えツ、何ですつて。

B子——戰爭なんて、そんな事が公に出來る唯一の機會なんだからねえ。

A子——お母樣。私の家へ、ほんとに武士達が參りませうか、ほんとに。

B子——キツと來ると思ふよ。さつきから何度となく家の前を逃げる町の人を追ひ廻す武士達の聲が聞える度に、私はごんなに恐しさに慄へたかも知れないよ。

A子——お母樣、何にも手向ひしない者にも、そんな事をするでせうか。

B子——(默つて首肯く。)

A子——あゝ、いやだ。——お母樣、私はいやです。私はいやですわ。そんな、そんな、辱めを受けるのは……(泣く)

B子——私も恐ろしい、お前を見て居られない樣にさへ思ふよ。(泣く)

A子——お母樣、逃げませうよ。早く。一刻も早く。

B子——今逃げたらお前、敵の中へ入つて行く樣なものぢやないか。

A子——でも……　でも。

B子——だからぢつと忍んで……

A子——(遮つて)いゝえ。私はいやだ。私は……いやだわ。敵の餌になるのをまつてゐるなんて。……お母樣はなぜあの峠が落ちた時、私が云つた樣に逃げて下さらなかつたの。なぜあの時今逃げてはあぶないなんておつしやつたの。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

あの時逃げれば、こんな事はなかつたんですは。（泣く）

B子――私がわるかつたよ。私はお前にほんとにあやまるよ。私は私の爲めにお前までこんな目に會はせてしまつた。ほんとにね。ゆるしてお呉れね。いざと云ふ時は、何うにでも私が出來るだけの事はするから。ねえA子。

B子――でも……でも私はいやですわ。……

B子――（獨白）あア、A子に斯んな事は云はないでもよかつたのに。私にはその時の覺悟がついて居たのに。なぜあんな事を云つてしまつたらう。（A子に）ねえ、A子。ゆるしてお呉れよ。お母さんがわるかつたんだからね。（と頭を下げる。）

A子――まあ、お母樣。そ、そんな事。いゝえ、お母樣に何にも……（傍白）なぜ私は女に生れて來たらう。女に。……（B子に）お母樣。私、私が女なのが恨めしう御座いますわ。（泣く）

（この時、窓の外に町の人の逃げるのを追ふ兵士達の群が、甲冑の音をさせて通り去る。これをきくと、發作的にA子は店の入口の戸の處に、B子は窓の戸の處に走りよりて、各自しつかりと締りをおさへる。緊張した數瞬。武士達の群が通過ぎて靜かになると、二人とも安堵の心でもとにもどる。二人の顏は更に〱恐怖に戰いてゐる。）

A子――お母樣。女はいやで御座いますわね。（うつ向く）

B子――ほんとだねえ。私もよくさう思ふのだよ。私が、女である爲めにどれだけの人が迷惑を着、罪をつくつてゐるか知れないのだもの。

A子――お母樣は男を呪はしくお思ひになりませんか。

B子――私にはさう思はれないよ。男を呪はしく思ふなら女も同時に呪はしく思はなくてはならないからね。

A子――でも、でも、女はいつも男の自由にされてゐるんですもの。

B子――自由にされてゐるんぢやないよ。女はそれだけのものなんだよ。女は男にどれだけ助けられてゐるかを考へなくてはならないからねえ。其處に、女の歩む道が廣がるのだよ。でも、今度の敵兵の亂暴は別だよ。男の弱さと、弱いから起る暴戾の恐しい罪なのだからねえ。

A子――あゝ、その罪に虐げられなくてはなりませんの。どうしても。私にはわかりませんわ。

B子――いゝよ。A子。私達には最後に賴る隱れ場所があるんだから安心をし。

A子――そんな處がありますの。ほんとに……

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

B子――あゝ。

A子――何處で御座いますの。其處は……

B子――其處へは、ほんとは、行つてはいけないのだけれど……A子、お前と私との最後の隱れ場所はお寺なのだよ。

A子――お寺？

B子――あゝ。お寺へ逃げれば、どうにかして下さるよ。お前が心配なら今夜の中にでも逃げてもいゝけれど……

A子――前からそんな御約束でもなさいましたの。ついぞ、お寺なぞにお母樣は御出でになつた事も御座いませんのに。

B子――いよ〱A子、お前に、お前のお父樣や、私達の身の上に就いて話をする時が來たのかも知れない。

A子――私のお父樣の話？　お父樣はもうなくなつてしまはれたのでは御座いませんの。

B子――御前の御父樣は生きておいでになるのだよ、この町に。

A子――えツ、この町に……

B子――あゝ。私はお前に私達の話を隱して來たのだよ。その方が御前の爲にも幸せだし、私達にも幸せだつたからねえ。

A子――で、それは何處の方ですの。

B子――あのお寺の御師匠樣だよ。

A子――まあ、お寺のあの……

B子――あゝ。

（一寸沈默）

B子――私がね、まだ京都に居た時分、御師匠樣も京都の本山に居らつしたんだよ。私が折々そのお寺へ御詣に行くといつも御師匠樣は御本堂の前や山門の內を掃除していらつしたのだよ。二人はいつとなく懇意になつていつたのだけれど、お互の心持は、隨分かけ離れて居ました。賤しい女だつた私は、知らずしらずに、御師匠樣を戀しいと思ふやうになつて了つたのです。けれども、御師匠樣は、唯、知り合ひとして仲良くして行かうとなされた。此方であまりにうちとけた心持で行くと、御師匠樣は苦しい御顏をなさつた。

A子――まあ。

B子――けれどもね。私にはその心持はわからなかつたのだよ。私は一づに御師匠樣を思つた。それは今考へれば恐ろしい程だつた。而して、御師匠樣も未だお若かつたし、到頭私に敗けておしまへになつたのだよ。私はうれしかつたけれど、御師匠樣はお苦しさうだつた。けれども、いつもあなたを見捨てる樣な事はありません、と仰しあつて下すつたのだよ。それから暫くたつてこの町のあの寺へ住職になつて御出でになる事になりましたの。

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

A子――それでお母樣も御一緒に此處へゐらつしたの。

B子――私も一緒に來ようと思つたけれど、抱へられてゐる家の都合もあつたし、それに御師匠樣は來てはいけないと仰しあつたものだから。

A子――(何か云はうとする。)

B子――(止めて)その時、御師匠樣は仰つたのだよ。「離れ〳〵になる事が、心までも離れて終ふ事にはならない。一緒に居なくては、又近くに居なくては愛が感じられない樣な愛を私達は持つてゐないつもりだ。顏をつき合はせてゐる時も、遠く離れてゐる時も、例へば死んでしまつた時でも、二人の心は一つの愛の中に融け込んで離れずにゐなければならない。それ位の愛は私達の間にあるつもりだ。」……私は、この心持が、まだその時には、わからなくつて、恥しい事には、お師匠樣に對する心の愛を身體から離して考へる事は出來なかつたのだよ。私は夫からずつと後で、お師匠樣は私から離れて――と云ふより、私の身體から離れて、眞んとうに私を愛さうとなすつてゐたと云ふ事がわかつたけれど、その時分は遠く旅立つたお師匠樣をどんなに怨んだかしれない。お便りは絕えずあつたけれど、而して、その中でやさしい心で私を慰めて下すつたけれど、やつぱり怨めしかつた。……お師匠樣が行かれてから、二月許り後に、初めて私はお前がお腹にある事を知つたのだよ。私はもうぢつとしてゐられなかつたから、無言で家を飛出すと、とう〳〵この町へ來てしまつたのだよ。

A子――お師匠樣にお會ひになりましたの。

B子――あゝ。でもお師匠樣は苦しい顏をして私をみつめて被居したけれど「大事にして、いゝ子を産んで下さい」と仰しあつた。而して「ゆるして下さい」とも仰しあつた。(間) それから一年許りたつてからだらうか、お師匠樣は、私達を養つてゐる事が、檀家や一宗の人達に知れて、寺を追はれ樣となすつたのは。

A子――まあ。

B子――その時、私は何度お前を殺して自分も死に、而してお師匠樣がお寺から逐はれるのをお助けしようと思つたかしれないよ。けれども、お師匠樣は「なアに、落付いていらつしやい。自分が惡かつたのですから。私が罪を引受ければいゝのです。どんな事があつても、あなたを捨てる樣な事はない。隣人として愛し終せなかつた私がわるいのです。」と仰しあつた。而してその時、何れ位、苦しまれたかしれなかつた。又「こんな苦しみなど私があなたを完全に愛せなかつた罪から考へればまだ〳〵淺いものだ。」とも仰しあつた。私も其時始めて自分の惡かつた事、自分の卑しかつた事がハツキリわかりました。お師匠樣を陷し入れたのは私なんだからね。而して、お師匠樣には、私が餘りに卑し過ぎると思ふと、私は何うしていゝかわからなかつたよ。私はお師匠樣の愛を感ずる事も出來なかつた稈卑しかつたのだね。

A子――それで何うなすつたの。

B子――もう私は自分の身がすまなくなつて、お師匠樣がお寺に止まる事が出來る樣になつた時、私はお師匠樣にお願し

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

て、又お詫して、此の家へ入つたのだよ。而してお前を育てゝゐたんだよ。私は隨分つらかつた。けれども御師匠樣の事を考へるこ勇氣が出て一生懸命に働いたものだよ。私は自分が女だつた爲めにお師匠樣に御迷惑をかけた事や、その私をも尊い愛で抱いて下すつたお師匠樣を考へるこ、ぢつこ手を合はせずにはゐられないよ。その時から私は男を恨めなくなつてしまつたのだよ。男許りぢやない人間が恨めなくなつて了つたのだよ。（一寸した間）私はお師匠樣から離れて始めてほんこの愛を知つた樣な氣がします。二人は離れてゐ乍ら、お師匠樣のお心は常に私の中に居らつしやる。而して常に會つてゐた時よりも、ずつこ安心して靜かな心持でゐられるのだよ。ぢつこお師匠樣の幸福をお祈りする時には、御師匠樣は常に私の中でよく微笑まれるのだよ。もう自分を考へる事がなくなつて來ました。こ云ふより、自分こいふものが考へられなくなつて來ましたよ。（間）それなのに、それなのに、さつきは、ごうしても、この町から離れる事が出來なかつた。私には急にお師匠樣の姿が強く映つたのです。……私が弱かつたのだね。私にはまだ未練があるのだね。まだお師匠樣のほんこの心持がわからないのだね。私の弱さこ未練こは、お前をこんな危ない場所におくやうにして了つた。（長い間）ねえA子。それでわかつたらう。私達の最後の隱れ場所がお寺だこ云ふ事が。……（靜かに泣く。）

A子――（間をおいて）えゝ。お母樣。（しめつた聲で）それでもお寺へ行つて宜しいでせうか。

B子――私は惡いこ思ふのだよ。けれごも、それが、もしもの時たつた一つ、お前にして上げられる私の心づくしだこ思ふのだよ。お前だけでも、ごうしてもさう爲なければねえ。

A子――私には、ごうしていゝかわかりませんわ。だけれご、私のほんこのお父樣が居らつしやる事がわかつて、まるで夢の樣な氣がして、……お師匠樣は私の事を知つてゐらつしやりませうか。

B子――もう、二十年にもなつてゐるから御存知はないかもしれない。しかし、聞いたら御喜びになるよ。きつこ。

A子――まあ。（こ喜びに輝く。間。又沈んで）お母樣も、隨分おつらかつたでせうね。

B子――私は私の罪亡ぼしが、これで出來れば、ごんなに幸せだらうこ思ひ乍ら、お前を育てたよ。

A子――お寂しかつたでせうねえ。

B子――寂しいのはお師匠樣から離れない前の方が寂しかつたよ。だけれご、お前こ二人になつてからも、時々大きな、――身のおき處もない樣な寂しさがやつて來る事があつたよ。そんな時、お前だけが、慰めて呉れたのだよ。

A子――私、何んだかすまない樣な氣がしますわ。

B子――なぜ。

A子――お母樣をお苦しめしたかこ思ふこ……

B子――何んの、人はみんなさうだよ、人の爲めに苦しんでゐるのがいゝのだよ。人に苦しみを與へてゐるのは罪だよ。人の爲めに苦しむのはほんこうの道なのだよ。

A子――すみません。……すみません。……（こB子の膝に泣崩れる。）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

B子――何アに……お前……（と云ひ乍らB子も涙で口がきけない。二人は泣伏す。この時。C子左手より逃げて出る。而して
あたりを見廻し、B子の家の窓を叩く。）

C子――もし〳〵。お内へ入れて下さい。早く入れて下さいませんか。隠して下さいませんか。
（とせき込んで云ふ。この聲にA子B子驚き、A子窓に耳をよせる。二人とも恐怖に包まれた緊張した面持。）

C子――（尚も戸をたゝき乍ら）入れて呉れませんか、どうか。追ひかけられてゐるもですから……
（A子とB子顔を見合はせる。B子突如立上つて、表の戸口に走りよると、直ちに戸をあける。）

B子――早く。こゝから、こゝから。（と吐鳴る。C子突差に表口の方に廻はる。その時C子を追つて來た武士一が出る。C子を入れるとB子は直ちに戸を締めたが、武士一はそれを見る。中に入れられたC子はぐつたりとして。）

C子――どうも有り難う御座います。今敵の武士に追ひかけられまして、此處までは、やつと逃げて來たのですが、もう疲れてしまつて……（とせつなさうに云ふ。）

B子――さア早くお上りなさい。おひかけて來るといけませんから。
（と云ひ乍ら、C子を助け上げる。その時武士一どん〳〵と戸を叩く。一同ぎくりとする。）

武士一――おい、早くあけろ。あけろ。

B子――（ひくいけれど力強い引締った聲で）A子。A子。早く戸を押へてお呉れ。早く。早く。一緒に。
（と云ひ乍ら、B子戸口にかけよる。A子も突差に駈け寄つて二人で戸をおさへる。C子もよろめき乍ら窓の戸を押へる。）

武士一――（尚も叩きつゝ）あけろ。早くあけろ。あけないと叩き壊すぞ。
（A子B子C子、無言のまゝ一生懸命に押へる。その時僧甲出る。續いて武士二出る。僧甲、表口の方へ駈けて行つたが、武士一と争ひ乍ら、後へもどり、其處へ武士二が加はりて三人は争ふ。争ひ乍ら。）

武士一――おい、そこの家へ逃げ込んだんだ。早く雨戸をぶち破つてしまへ。（と武士二に云ふ）

武士二――よし。（と行かうとする。甲さへぎる。この争ひの物音を窓の中からC子は雨戸越しに聞いて苦悶の表情。武士二人は甲を倒す。表口の方へ逃げて行つて、二三度亂暴に叩いたかと思ふと雨戸をはずして入る。）

A子――アレ。（と逃げようとする。武士一いきなりA子を捕へる。武士二はC子を捕へる。）

武士一――飛んだい、獲物だ。（其處へ甲が驅込んでB子と共に武士達と争ふ。甲、武士二の刀を抜取り斬付ける。血が法衣にかゝる。
武士二思はず後へ下る。その暇に甲、C子をつれて逃げ出す。）

甲僧――さア早く。お寺へ、お寺まで……（武士二外へ追つて出た時はもう二人はゐない。）

武士一――一人逃しても、こいつを連れて行つちまへ。
（とA子を引抱へて行かうとする。B子、A子共に争ふ。B子は武士二に蹴られる。おき上らうとする處を、甲が投出して行つた刀で斬倒される。A子は、「あッ」と聲を上げてすくむ。それを二人がかつぎ上げて外へ向ふ。あとに奥に押しやられた行燈と、B子の動かない死骸のみが殘される。）

――幕――

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

返照録

○土屋浦子姉（茅ヶ崎）　御多忙中を意味深き御言葉たまわり本當に恐れ入りました、私は一昨々日の出來事をどうしても申上度いと思つたので拙きペンを又々とりました丁度それは四月三十日の事、思はずも心からのたく鉢（？）をさしていたゞけた事で御座いましたその時にそう思ひました。天香樣は京都私はその日は牛込にて體は遠く〱はなれてゐたけれど御一所に居ると同じだと思ひました。天香樣とはなれてゐてしかも御そばにゐるのだなと思ひましたもう過ぎし事ながら私が岡田先生に御敎へを受けて居りました時、主人が岡田先生の御そばでの靜座では岡田先生のなき後きつと〱その人はだめになる岡田先生をはなれても出來る靜座でなければならぬ、と申きかされ自分も深くそれを信じて居りました、そのおかげで岡田先生御死去後の今もほんとに岡田先生とは常に御一所に居る心地がいたして居ります、で今度の場合とてもそうだと思ひました御一所に居られる時御一所にゐようと思ひました、しかも先日は天香樣の御そばでなしに御敎へをいたゞけましたのも、それが本當に〱有難いと存じました、その事はこうで御座いました二十九日夜里に一泊いたしました丁度色々の都合から一人も女中なくひろい家に兄姉姪の三人表の方にに二三男の人が居りますが奥の事は姉一人にてやつて居りました、（丁度その時一人のめみへの人がまゐつては居りましたが）今まで多くの人に色々してもらつて居た家、本當に大變だと思ひましたゞけれども又その時をあたへられた里一行のものは本當に一時なりと幸福だつたと思ひます、常に味ひ得ぬ事を味つたので御座いますから私、心から却つて喜びました。あけの三十日丁度私の子供の墓まゐりいたすまへ常に御はづかしいながらねばうの私、早く起き心からよろこんでかなり〱ひろい家今使用しつゝある室々の掃除をしたので御座いました、こんな事はつまらぬあたりまへの事で御座いませうが丁度自分の家以外でたとへ一寸でも働いて見度いと思つて居た私にその尊い時をあたへられた事をどんなに〱感謝いたした事でせう、自分には自分の家庭にすべき事が澤山ありながらわがまゝがあつて出來得ぬ心のなやみを、一寸でも他にてわがまゝなしの働きをしてその氣分を少しづゝなりとやしなつてまづ〱我家に於ての働きも他にて働く心と同じにしたいとねがつている私の心には本當にその朝がうれしくて〱たまりませんでした。

十年前同じ家でいたした私の心のあまりにみにくかつた事をかへり見て一人はづかしく思ひました、その時今の心さへあれば現にこんなに自分が苦しまずともすんだのにと、兎に角三七日の朝に淸い〱心になつていとまをつげ淺草の墓にもうで茅ヶ崎へかへりましたは、夕方の五時頃で御座いました朝が淸い心で出かけただけ色々道々思はされました、すべての人樣の樣子が色々に感じられました。妙に心苦しい事にもかず〱出あひました、だけど心苦しく感じる自分が氣の毒に思はれました、で二時の汽車にのり茅ヶ崎へつくと東京のしかも淺草のような人ごみは思ひもかけずたゞ〱耳にきくは波の音松風の音、目にうつるはむぎ畑、その中を小一時間しりはしをりかさをかたに荷をしよつてすたこら〱我家をさしてあるいて居りましたら又々朝の淸い〱心にかへりました。私はなんてよわいだらうと思ひましたあの人ごみの中に居てもむぎ畑の中をあるいて居る時も同じ心でゐられぬとは、ほんとに〱人間は日々こうしてみがかれて行くので御座いますれこうかいて見ますと思つた萬分一もあらはされぬかなしさ御らんあそばしてもどこをとらまへてよいかゞわかりにくいでせうが拙き文意、御くみとり下さいませ、私はたゞ〱三十日の朝の氣分を心から御禮申上たかつた爲にこんな事を認めたので御座います、本當に〱私も一心に御佛に御すがり申ませう、御佛の道はあまりに淺い私ながら死んだ子に兎に角導かれて御佛に御すがりする心が出ましたどうか〱無言の御敎へをいたゞかして下されませ。御そばに居ずともたしかにいたゞける事と信じて居ります、御緣さへ結ばれゝば又したしく御目にかゝれる事と樂しんで居ります、文意のあまりにつたなく申あらはせずねごとみたい事をならべ、本當に御めん下さいませ御返事いたゞかずともいたゞいたと同じ心で居りますから。（天香さん宛）

大正十一年九月三十日印刷納本　代金
大正十一年十月十五日發行　廿錢
東京市牛込區原町三丁目五十三番地
編輯兼發行兼印刷人　中桐確太郎
印刷所　株式會社一匡印刷所
東京市牛込區原町三丁目五十三番地
發行所　東京宣光社

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

謹告

事務整理の都合上、本誌の發送及び代金の收受等に關することは、一切、左記で取扱ふやうに致しました。これまで東京宣光社や玄光社で御預り申してをりましたものは、改めて移渡しましたから、さやう御諒承下さいまし。

京都市柳ノ馬場三條下ル　宣光社

振替口座大阪五九八三九番

但し編輯のことは從來の通りに致して置きますから、その方の御用はやはり、

東京市外戸塚町上戸塚五八〇玄光社内（省線高田馬場下車）松下吉衛

宛にて御申越し下さるやう御願ひいたします。

小野實著

最新刊

切支丹の殉教者

四六版本綴四百頁
コロタイプ二葉
挿畫古畫六葉
黒澤武之助裝幀
定價金貳圓五拾錢
送料金拾四錢

切支丹迫害は、邦人の殘忍性を最もよく發揮せると共に又邦人の偉大性を最も鮮明に顯揚したり、これが唯一の史料たる「鮮血遺書」と「復活せる公教會」とは、文壇の耆宿内田魯庵氏をしてバイブル以上に感動せしめたりと傳へらる。然れども明治初年の出版にして文章稍々難解に過ぐるため、カトリックの俊才小野文學士が流麗に書き更めしもの。

最新刊

杜翁記念文庫
第拾九卷

荻原井泉水譯

ゲエテの言葉

布表紙函入
頗美本紙數
三百四十頁
定價金壹圓八拾錢
送料金拾貳錢

近世浪漫主義の巨頭にして世界文學の覇王たりしゲエテがエッケルマンとの對話を主とし、これに彼が自叙傳の全譯を附して一卷となせしもの本書也。それ偉人が心裡の懐抱を語るは却つてその著作よりも、不用意なる對話回想等の場合に多く、片言隻句の唾玉よく宇宙人生の祕義を道破す。新秋讀書の好時期、思を永遠に馳する思索家諸君の机邊に薦む。

トルストイ名著集

春秋社譯	露國民話	紙數七百六拾頁 定價金八拾錢 送料金拾錢
飯田敏雄譯	露國々民傳說	紙數二百六拾頁 定價金六拾錢 送料金八錢
加藤一夫譯	宗教とは何ぞや	紙數三百八拾頁 定價金七拾錢 送料金八錢
福永挽歌譯	短篇三種 アリベルト・ルセルン・ゲーム取人	定價金七拾錢 送料金八錢

文藝雜誌 讀書子 第一號　郵券貳錢封入申込次第進呈

發行所 東京神田表神保町 春秋社 振替東京二四八六一 電話神田二一三八

大正十一年八月五日第三種郵便物認可（毎月一回十五日發行）
大正十一年九月三十日印刷納本 大正十一年十月十五日發行 『光』第十六號

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN